

主催: NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援:文部科学省/日本ユネスコ国内委員会/公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟/株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」 教育と言われています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を 目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を 変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続 可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

8回目となる今年は、全国の小・中・高等学校49校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第8回ESD 大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめさせていただきました。

なお第8回ESD大賞は、カシオ計算機株式会社様、ネスレ日本株式会社様よりご協力を いただきました。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに 寄与できれば幸いです。

目 次

◆ はじめに	· 1
◆審査にあたって	. 3
◆ 講評·····	. 4
◆文部科学大臣賞	
福岡県大牟田市立吉野小学校	. 5
◆ユネスコスクール最優秀賞	
千葉県立桜が丘特別支援学校	10
◆小学校賞	
東京都大田区立赤松小学校 ·····	15
◆中学校賞	
埼玉県さいたま市立大宮八幡中学校	20
◆高等学校賞	
神戸大学附属中等教育学校 ·····	25
◆ベスト・アクティビティ賞	
北海道札幌平岸高等学校 ·····	30
◆スタートアップ賞	
宮城県仙台市立郡山中学校 ·····	35
◆ネスレ日本ヘルシーキッズ賞	
東京都目黒区立田道小学校 ·····	40
大阪府泉南郡岬町立深日小学校	45
◆企業の社会貢献活動事例	
ネスレ日本株式会社	50

【審査にあたって】

第8回ESD大賞の審査にあたっては、ESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、この目標の実現に向けた実践が、学校として組織的・計画的・継続的に行われているかについて評価しています。

なお今年度より、ESDのより一層の普及を図るため、「ベスト・アクティビティ賞」と「スタートアップ賞」の2賞を新たに設けました。ベスト・アクティビティ賞は学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰するものです。また、スタートアップ賞はユネスコスクールに加盟して3年未満で優れた実践を行っている学校を表彰します。

さらに昨年度に引き続き、企業特別賞である「ネスレ日本ヘルシーキッズ賞」も設定しています。本賞では、ESD大賞の審査基準を満たした小学校の事例のうち、特に次の4つの観点から、子どもの意識・行動変容につながっている優れた事例に対して、賞を贈ります。

- ① 「からだづくり」に前向きな子どもを育てている
- ② 仲間と共に行動することで喜びや楽しさを分かち合うことができる
- ③ 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てる
- ④ 子どもの自尊感情、自己肯定感を高める

本賞は、「自分のからだは自分でつくる」をコンセプトに、次世代を担う子どもの健康づくりをサポートするネスレ日本株式会社の特別協賛により設定されています。

なお、賞から外れた学校にも優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、 ESDの発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

文部科学大臣當 … 福岡県大牟田市立吉野小学校

取組のねらいは、地域と協働による桜プロジェクトの活動によって「児童一人一人が持続可能な地域社会の一員として自 賞し、行動できる能力・態度の育成及び郷土を愛する小情の涵養を目指す | ことである。地域の方々との触れ合いを軸に、 学年毎に段階を踏んで目標を設定し、地域活性に向けた取組を行っている。さらに、FSDストーリーマップとしてカリキュ ラムを作成し、日常の各教科等の授業の工夫改善に努めている。ESDのねらいである知識、価値観、行動の育成を目指す教 育活動が全校的に展開されている点が高く評価された。

ユネスコスクール最優秀賞 … 千葉県立桜が斤特別支援学校

テーマは「「つながり」と「発信」の活動を通して、障害の有無に関係なく共に支え合いながら生活できる「共生社会」 の構築」である。活動を「学校内でのつながり」、「地域とのつながり」、「他校とのつながり」、「社会や学校外とのつながり」 の4つに整理している。校内でのあいさつ運動や被災地の熊本へのメッセージ送付など、生徒の発案で生まれた活動もあり、 共生社会の構築に向けて自分達にできることを考え、行動に移す生徒たちの姿が見られるようになった。ユネスコスクール の理念を生かした教育活動が評価された。

小学校當 … 東京都大田区立赤松小学校

日常的な教育活動を充実させることで、FSDへの取組の一層の充実を図ることをねらいとしている。学習指導要領に示す 「生きる力」を「価値観」と「体系的な思考力」に視点を当てて独自にカリキュラムを整え、「赤松小学びのスタイル」の確 立を目指している。多くの教科で検証授業を重ね、「アクティブ・ラーニングの充実」「『価値観』を育む授業の創造」といっ た視点から討議を通して指導の充実を図っている点が評価された。

中学校賞 … 埼玉県さいたま市立大宮八幡中学校

「ESDの活動を通して生徒の学習意欲を高め、学力の向上を図る授業の構築」をテーマの一つとしている。「世界の現実を 知り、何ができるかを考え、身近なことからどう行動するか | という学び方を、日常の教育活動を通して身に付けられるよ う取り組んでいる。また、校内体制として「地域・環境・人権プロジェクト」と「国際理解・多文化共生プロジェクト」を 立ち上げ、全教職員が組織的・計画的に取り組めるよう体制を整えている点などが評価された。

高等学校當 … 神戸大学附属中等教育学校

グローバルキャリア人の育成を教育目標に掲げ、地球的課題を踏まえながら国際的に活躍できる生徒の育成を目指してい る。教科横断的、中・高一貫のESD特設科目を設け、例えば5・6年生では「地球の安全保障」をテーマに、生徒が自主的 に調査し研究成果を18000字以上の論文としてまとめている。その他、ESDに取り組む海外の学校との交流、IICA教育視察 団の受け入れ、震災・復興・減災仙台プロジェクトへの参加等も含め、グローバルな実践が評価された。

ベスト・アクティビティ賞 … 北海道札幌平岸高等学校

昨年度は札幌市円山動物園での取材を基に、札幌市環境教育のキャラクター「ちっきゅん」を主人公にした環境教育デジタ ル絵本を制作、市の電子図書館から貸し出しを行った。さらに、今年度は生物の多様性に関する電子絵本を制作し、市民に貸 し出すとともに市内小学校での読み聞かせ活動などを行っている。その他、ライブアートとして人と動物と共生へのメッセー ジ壁画の作成などにも取り組み、アートコースならではの「デザイン」という強みを生かしたESD実践が評価された。

スタートアップ賞 … 宮城県仙台市立郡山中学校

2017年にユネスコスクールに加盟。地域の防災力と防災意識を高める活動に主体的な関わりを大切にしている。主な活動 として、生徒会が主導する地域住民参加型の地域防災訓練と生徒と地域住民がともに学ぶ防災シンポジウム、津波被災農家 に弟子入り体験活動を行っている。これらの活動を通して世代を超えた多様な人々との支え合い、助け合う心の育成、安全・ 安心な地域づくり、持続可能な地域コミュニティの形成に取り組んでいる点が評価された。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞 … 東京都目黒区立田道小学校

「食・栄養・健康」を核にした健康教育に全校あげて組織的・計画的・継続的に取り組んでいる。児童一人一人が自ら健 康づくりに励む子の育成を目指す活動として、養護教諭と担任の連携による食の指導、ペースランニングや田道小体幹体操 などによる健康づくり、パラリンピック出場選手との交流学習などを行っている。本賞の評価基準にかなった実践として受 賞した。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞 … 大阪府泉南郡岬町立深日小学校

授業や学校行事などを通じて、岬町教育委員会、和歌山大学の協力を得ながら「児童が主体的・対話的に課題をもって体 力づくりを行うこと | をねらいに子供たちの体力づくり、スポーツに意欲的に取り組む態度の育成に取り組んでいる。小大 連携によって、3年間で子供たちの運動能力の成績が大幅に向上しただけでなく、キャリア教育にもつながっている。本賞 の評価基準にかなった実践として受賞した。

文部科学大臣曾

福岡県大牟田市立吉野小学校 校長 橋本 一郎

地域の活性化を図るための地域との協働 ~桜プロジェクトを中心とした取組~

はじめに

本校は、自然豊かな地域にある。一方で、九州新 幹線の開通と共に、駅の新設、道路の整備等が行わ れ、地域の環境も変わってきている。また、商業形 大切であると考える。 態・消費生活の変容によって、校区内の商店街の様 いな学校が地域の特色の一つでもあったが、現在で は桜の老木化や住宅地の整備により、桜の木も少な くなってきている。

そのような中、平成25年「桜プロジェクト」と題 して、吉野のまちを活性化させる取組を始めた。

1 ねらい

桜プロジェクトを中心とした全校的な取組及び地 域との協働的な活動を通して、「吉野のまちの活性 化 を図り、持続可能な社会の一員として自覚し行 動できるような能力・態度及び郷土を愛する心情の 育成を目指す。(SDGsの11 関連3.13.14.15)

2 ESDで身に付けさせたい能力・態度の学校化

国立教育政策研究所から示されているESDで身 に付けさせたい能力・態度を基に、学校独自に小 学校段階における姿、そして低学年・中学年・高 学年の姿を設定した。さらには、7つの能力・態 度を問題解決能力、伝え合う力、関わる力、行動 力と整理して取り組んでいる。

そのようにめざす姿を具体化、焦点化すること で系統的に段階的に持続可能な社会の一員として 自覚し、行動できる子どもを育成することができ ると考えた。

3 地域との協働について

持続可能な社会の一員として、地域のまちづく りへ働きかけるには、人々と協働していくことが

そのためには、地域との関わりやつながりを深 相も変わってきている。さらには、吉野小学校が開 める活動を意図的に行うことが必要であると考え 校した約60年前は、桜がたくさんのまち、桜のきれる。そこで、主に4つの視点からその活動を学習 等に位置づけながら取り組んでいる。

4つの視点とは

1つは、子どもたちから地域へ働きかける活動。

2つは、地域の方から子どもたちへ教えてもらうな どする活動。

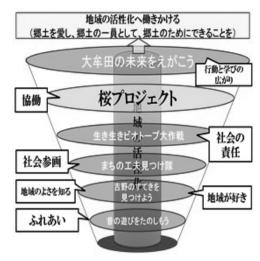
3つは、子どもと地域間において双方向(交流など) の活動である。

4つは、共通の目標を持ち、それぞれの立場から 活動したり、一緒に活動したりすることである。

このようなつながり・関わりを深める活動を通 して、人々と協働することの意味や価値も体感で きるようにしている。また、これらの活動は、学 習のねらいや発達段階を考慮して検討している。 桜プロジェクトを中心とした「吉野のまちづくり」 への各学年の働きかけも【図1】のように学年間 の系統を考えている。

○地域の活性化へ向けた取組<地域とのつながり・関わりを深める活動>

形態	内容	活動例
I 子ども達から地域へ		
子ども地域	学習したこと、 思いや願いの発信	ユネスコスクール フェスティバル
I 地域から子ども達へ子ども地域	GTから知識・ 技の伝達	ネーチャーガイド 地域の方・ボランティア 町づくり協議会との 交流
Ⅲ 子ども違、地域の双方向の交流 子ども 地域	考え、思い、 願いの交流	地域の方との目標・活動内容についての交流 地域の方の声を生かす
Ⅱ 子ども達と地域との協働 子ども 地域	目的を共有し、 立場に応じて活動	「桜プロジェクト」 において、それぞれ の立場で活動



【図1 地域の活性化へ向けた各学年の取組】

4 実践内容

吉野の地域の活性化のため、地域の方々との関 わりを多くして、まちのよりよいイメージを共有 し、協働した活動を工夫し、実践を進めてきている。 様々な実践を通し、地域への(見方・関わり方) <3年生> が(点・個別)から(面・協働及び機能的)へ系 総合的な学習の時間 統的に高まるように取り組んでいる。

<1年生>

生活科

「昔の遊びをたのしもう」

人とふれあうことの楽しさを味わっている。



【昔遊びの行い方を教えてもらう子どもたち】

<2年生>

生活科

「吉野のすてきみつけよう」

吉野校区の季節に応じて変わる「すてき」と季 節が変わっても変わらない「すてき」を見つける ために、地域の人・ものへ働きかけながら、それ らの素晴らしさを味わっている。



【地域の方へインタビューする様子】

「吉野のまちの工夫見つけ隊」

この取組は、福祉の視点からまちづくりについ て関わる社会参画の第一歩である。

子どもたちは、吉野校区を住みよいまちにする 昔遊びを行うことやその遊び方を教えてもらう ために現在行われている工夫を見つけると共に、 ことを通して、地域の方の知恵や温かさに触れ、 もっとまちをよくするためのアイディアを自分た ちなりに考え地域へ発信している。



【地域のよさを見つけ発信する様子】

<4年生>

総合的な学習の時間

「生き生きビオトープ大作戦」

ていくこと、創っていくことを体験していく場で ある。ビオトープを守り、創る主な活動は子ども たち主体で行っている。このことは、自分たちの 手で創りあげていく身近な体験の場となっている。

また、専門的な知識や大人の手が必要なことも あるため、地域の方の知恵や技術等の援助を受け、 ビオトープを整備している。地域の方々と活動す ることの大切さを学ぶ機会でもある。



【地域の方に教えてもらいながら一緒に活動する様子】

<5年生>

総合的な学習の時間

「吉野小桜プロジェクト」

これまでの1年生から4年生までの学習が、地域の 方との協働やよりよい吉野のまちづくりを意識した取 組を生かした「桜プロジェクト」につながっている。

このプロジェクトでは、地域の方とまちのイメー ジを「桜でいっぱいの美しいまち」という目的の 共有化を図っている。その上で、子どもたちの立 場から何ができるかを考えたり、地域の方にアド バイスをしてもらったりして、植樹や桜の保護、 環境の整備、広報活動・地域行事への参加等の活 動をしている。

また、子どもたちは、取組内容を検討していく 中で、自分たちにできること、大人に手伝っても らうこと、大人にお願いすること等仕分けしなが ら、自分たちにできることを考えている。

特に、自分たちで行ってきた活動は、桜を守る活 動と桜のことを広める活動である。桜を守る活動で は、季節に応じて肥料を足したり、草刈り・水やり・ ビオトープの管理人として、環境や生き物を守っ落ち葉清掃をしたりしている。桜を広める活動では、 地域の祭りなどに参加し、桜でいっぱいの美しいま ちづくりの取組を行っていることをピーアールし、 多くの方に知ってもらうようにしている。



【桜の調査活動をする様子】



【地域の祭りで桜をピーアールする様子】



【植樹をする様子】

地域の方と協働していくために、子どもと地域の 交流会を複数回設定している。交流会の内容として は、「目的の共有化」「自分たちが行っている取組に ついて絆プロジェクトの方にアドバイスをもらうこ と」「吉野小桜プロジェクトと絆プロジェクトのそ れぞれの取組を交流し合うこと」が主である。



【絆プロジェクトの方にアドバイスを受ける様子】

<6年生>

総合的な学習の時間

「大牟田の未来をえがこう」

6年生では、吉野校区から大牟田市という視野 を広げたまちづくりについて考え、行動できるこ とに取り組んでいる。

○福祉に関するまちづくり

大牟田市では、認知症の方やその家族を支える ために、まちで出会った認知症の方にみんなで声 をかけていこうという取組がされている。そこで、 地域の民生委員さんにアドバイスを受けながら、 自分たちにできることを考え、行動している。



【民生委員さんにアドバイスを受ける子どもたち】

○世界遺産に関するまちづくり

大牟田市には世界遺産である明治日本の産業革命 遺産である炭鉱関連資産がある。その世界遺産を活 かしたまちづくりについて考え、行動している。





【大牟田をピーアールするパンフレットと新聞】

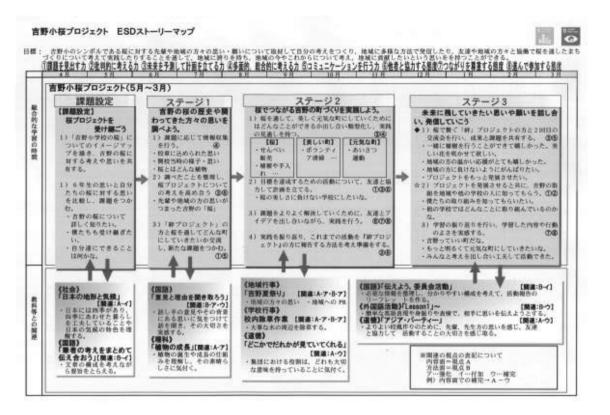
5 連携の広がり

○本校では、地域との協働として、地域の豊富な 人材を活用している。特に桜プロジェクトでは、 地域の「さくら絆プロジェクト」の方と「桜の美 しいまちをつくろう」という共通の目標を持ち、 協働した取組を行っている。

この地域の「さくら絆プロジェクト」は、子どもたちの活動に賛同された、民生委員さん、子ども見守り隊の方、保護者等で結成された地域のプロジェクトのことである。さくら絆プロジェクトの方々は、定期的に会合を開かれ、子どもたちの活動を支援する取組や、さくら絆プロジェクト独自でできること等を話し合われている。また、活動報告としてチラシも発行し広報活動も行い、子どもたちの活動を支援していただいている。

6 ESDストーリーマップの作成

これまで様々な取組については、子どもたちの主体的な学びや活動となるよう、ESDストーリーマップを作成している。ESDストーリーマップとは、総合・生活を社会、理科、道徳等の他教科領域と関連させ、子どもたちの思いや思考を一つのストーリーとした具体的構想のことである。子どもたちの思いや主体的な活動を大切にしたいということから作成している。



○ EDで身に付けさせたい能力・態度について

下の表のように、ESD で身に付けさせたい他力・態度を発達段階ごとに具体化し、意図的・計画

的に能力・態度				
ESDで身に付け	させたい毅力・態度	低学年	中学年	高学年
	〇体験や学習を通	・先生と一緒に、体	体験や学んだこと	体験や学んだこと
□開題を		験による気付きや事		
見出す力		象の比較からやりた	す。	し、その理由を明
	を見出す力	いことを決める。		に持つ。
THE SHAPE OF ST	0.54.57.8891	・自分の思いや難い		
6.0	機器を開心をなり	参持って貼り強く活	1411149	****
423	分の考えを持つカ		2.5	様な考えをつくる
		先生と一緒にアイ		
して計画を立	するカ	デアを出し合いなが	持って道究する。	もと見通しを持ち、
てるカ		ら計画を立てる		計画を立てる
GSEN, MA	O事業をいろんな	・事業を比べたり、	・調べたことを比較	・調べた事実を開
的に考える力	角度から考えたり。	たとえたりしながら	したり、分類したり	づけて考え、根拠
	他の事象と関係づ		して考えまつくる	
	けて考えたりする	(比較・たとえ)	(計載・分類)	とができる。
	th .			(雄-蜂-騎介-難)
		・自分の言葉で表現		
		・自分の言葉で表現 し、理由を加えて伝		
0011277-	いて、ひかりかす	えることができる。	くを埋して表明し、	か知わらように.
カ	く伝える力	Xeceptee.	5.	大田えることがで
,,	\mx+033		٠.	å.
	〇相手の気持ちや	相手の気持ちを考	自分の考えと比べ	・互いの立場や
	立場を理解しなが	えて、難し合うこと	ながら聞き、共通点	間、考えの複数を
		ができる。	や差異点を明らかに	
			しながら話し合うこ	うことができる。
			とができる。	
願わる力		・友達と仲良く学習		
		し、友達のよさを進		
る態度		んで見つけることが		
	るカ	できる。	速と協力して課題を	
	I		解決しようとするこ	
			とができる。	することができる
行動力	〇社会の一員とし	・地域の自然や	学校や地域のよう	これからの地域
②つながりを導	ての目覚を持ち。	人々。公共施設との	を見出し、身近な自	社会の在り方につ
		関わりに気付き、親		
		しみを持つことがで		
る態度	うとするカ	80.	ことができる。	てはたらきかける
	0.00 W 10 W 1 A W			とができる。
	リチ育で用った思	気付いたことを生	・子質を通して持っ	・子質を通して粉
		燃に生かしていこう		
		とすることができ	に生かそうとするこ とができる。	
		5.		生ほを求めること:
	るカ	0.	C 4- C 0 01	786.





ユネスコスクール最優秀賞

千葉県立桜が丘特別支援学校 教諭 森 裕紀子

「つながろう」桜が丘から 地域へ 世界へ そして未来へと ~共生社会の構築をめざして~

1 はじめに

本校は千葉県千葉市にある、肢体不自由児が通 う特別支援学校である。小学部・中学部・高等部 の3学部があり、約170名の児童生徒が在籍してい る。それぞれの学部にA課程(進ずる教育を行う 課程)、B課程(下学年適応及び各教科等を合わせ た指導を主とした教育を行う課程)、 C課程(自立 活動を主とした教育を行う課程)の3つの教育課 程があり、児童生徒の実態の幅が大きい。また、 寄宿舎も併設されており、生活の自立を目指して 中学部・高等部の約30名の生徒が利用している。



2 本校のESDのキーワード

- ①つながり
- ②発信する・伝える
- ③共生社会の構築

3 本校のESD活動の概要

本校の児童生徒は、障害をもち、自分から関わ る力や発信する力が弱いという一面をもっている 児童生徒が多い。ユネスコスクールに加盟し、様々 な学校と交流したり、地域や社会と積極的につな がりをもとうとしたりすることが、児童生徒に とって、「外とつながる力」「発信する力」「人と 府の学校との交流学習も始めている。

関わる力 | を育む大事な学習であると捉えている。

本校での取組を外に発信していくことで、障害 をもった児童生徒や特別支援学校を知ってもらう 機会となり、障害者や特別支援学校への理解が深 まり、それが、障害の有無に関係なくお互いに助 け合い認め合いながら過ごすことのできる「共生 社会の構築 | へとつながると考える。よって、本 校のESD活動は、「つたえること、つながること、 ひろがること」というキーフレーズのもと、「学校 内でのつながり | 「地域とのつながり | 「他校との つながり「社会や学校外とのつながり」の大きく 4つにわけて活動を整理してまとめている。

桜が丘特別支援学校のESD

「つたえること、つながること、ひろがること」

学校内での つながり (人との つながり)	地域との つながり	他校との つながり	社会や 学校外との つながり
暗宝の有無し	- 関係かく 人上	人が助け合い謬ん	め合いたがら

生活することのできる共生社会の構築をめざす

「学校内でのつながり」では、友達や先生、家族、 来校者など様々な人とのかかわりやつながりを大 切にし、伝える力、関わる力を育んでいる。

「地域とのつながり |では、学校周辺のゴミ拾い をしたり、近隣の自治会の方を学校に招いてミニ 集会をしたりして、地域の方々とのつながりを大 切にした活動を行っている。

「他校とのつながり」では、小・中・高等部がそ れぞれ共同及び交流学習で近隣の小・中・高との 交流学習を行い、同学年の友達とのかかわりを大 切にしている。また、29年度からは、サステイナ ブルスクール同士の交流学習として宮城県や大阪

「社会や学校外とのつながり |では、本校の取組 や生徒の体験談を学校外に発表したり、海外の食 の大切さ、友達と協力することの大切さを実感す 事や生活についての学習を通して世界に目を向け る機会を設けたり、外国の教職員団の学校訪問を 積極的に受け入れたりして、社会や世界とのつな がりを大切にした活動を行っている。

4 本校の実践の具体例

<ESDの主な取組>

(1) 学校内でのつながり(人や物とのつながり)

「つながり」の第一歩は友達や先生、家族など自 分の身近な人との関わりやつながりを大切にする こと、そして、自分の生活している環境、身の周 りの物との関わりを大切にすることである。と考 え、友達と関わる場面を多く設定したり、人前で 発表する活動を多く設定したりしている。



生徒会が中心となって 隣のクラスの友達とバンドを 取り組んだあいさつ運動 組んで演奏&発表



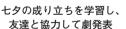
土で遊ぼう

~友達や自然とのつながり~



校内駅伝大会で学年を 越えてのたすきリレー

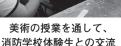






安定した歩行をめざした 身体の学習





様々な人との関わりを通して、人とのつながり ることができている。

(2) 地域とのつながり

運動会や文化祭だけでなく、学校の様々な行事 を地域の方に知っていただき、本校の周辺地域と のつながりを大切にしている。また、公共の交通 機関を利用して通学している生徒達の安全や安心 を一緒に考えてくださり、押しボタンの位置や信 号の長さを変えたり、車いす通行の看板を設置し たりなど、地域の方々も本校児童生徒のことを温 かい目で見守ってくださっている。



生徒会活動で 学校周辺のゴミ拾い



運動会や文化祭のポスターを 学校周辺の商店に配布





卒業後の生活に向けて、社会経験の広がりを目的に、 公共の交诵機関利用体験や外食体験を行っている





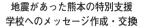
生徒達自身の声が届き、押しボタンの位置や信号の長さが 車いすで使用しやすいように変更

今後も地域の方々との関わりを多くもてる活動 を児童生徒達が主体的に考え、実行していきたい。

(3) 他校とのつながり

小学部・中学部・高等部それぞれが、本校の近 隣にある桜木小学校、加曽利中学校、市原八幡高 等学校、若松高等学校との交流学習を定期的に行っ ており、同年代の児童生徒とスポーツや音楽をし たり、ディベートをしたりして、お互いによい刺 激を受け合っている。また、それだけでなく、フィリピンやアメリカとの交流学習を行ったり、国内の特別支援学校と交流をしたりと、国内外の様々な学校と積極的につながりをもっている。







We are the worldを歌って アメリカと交流学習



近隣の小・中・高等学校と交流および共同学習を実施



千葉大学ESD研究会で 実践報告

同年代の児童生徒とつながることで、刺激を受け合うだけでなく、児童生徒の興味関心の幅や視野が広がり、様々な人とのつながりの中で豊かな心が育まれていくと感じている。

(4) 社会・学校外とのつながり

学校外や社会、海外とのつながりをもつことで、 多くの人と関わることができるだけでなく、さら に広い視野で物事を捉えたり考えたりすることが できると考えるので、学校外での児童生徒の活躍 の機会を多くもてるようにしている。



文部科学省でボッチャを 広めるイベントに参加



全国大会やスポーツ大会に 積極的に参加





12

いのちを大切にするキャンペーン実践発表会で 学校の取組や体験談を発表





「地産地消」の学習や給食で「世界のごはん」を実施して 社会や世界とつながる





外国の教職員団の学校訪問を積極的に受け入れたり、 海外研修に積極的に教員を派遣したりしている

様々なスポーツ大会に参加したり、海外とのかかわりをもったりして学校外とのつながりを大切にすることで、社会や世界に目を向け、「持続可能な社会の構築」「共生社会の構築」にも目を向け考えるきっかけになっている。

<平成29年度からの新たな取組>

(1) サステイナブルスクールとしての取組

「つながり」「発信する」ということを大切に「共生社会の構築」をめざすという取組は継続して取り組んでおり、「つながり」を学校内でのつながり(人や物とのつながり)と地域とのつながりと他校とのつながりと社会・学校外とのつながりの4つに分類して取組をまとめ、発信している。また、今年度は、「サステイナブルスクール」としてサステイナブルスクール同士のつながりを大切にした交流学習にも取り組み始めている。

学部	交流校	交流内容例
小学部	宮城県登米市米谷小学校	・自己紹介カードの交換 ・合同制作の図工作品を作る ・ビデオレターを送り合う 等
中学部	NPO法人 箕面こどもの森学園 (大阪府)	・自己紹介カードの交換・両校で同じ歌を歌う・意見交換をする等
高等部	ESD(未来につなぐ教育)部会で 県内のユネスコスクール加盟 高等学校と交流	・持続可能な未来について、高校 生同士でディスカッション ・千葉大学ESD成果報告会で学 校のESDの取り組みを発表 等

他県のユネスコスクールとの交流学習を通して、相手のことを知るだけでなく、自分たちの良い点を知ることができたり、相手校に自分たちのことをどのように伝えればよいかを考えたり、より多くの方に自分たちの取組や思いを伝えたいと

いう気持ちや意識が芽生えたりしている。

①サステイナブルスクール同士での交流学習





小学部と中学部の交流学習の様子。自己紹介カードを交換 したり、交流校との合同作品を作ったりする活動に取り組 んでいる。送られてきた交流校の自己紹介カードをとても 嬉しそうに見ていた。

②ESD部会





ESD部会の活動で千葉大学ESD研究会に参加。 防災や平和についての講話を聞いたり、千葉県内のユネスコスクールの高等学校の生徒同士で意見交換をしたりした。 また、ESD部会でつながった県内のユネスコスクールの高 等学校の文化祭に生徒が自主的に参加する様子も見られた。 ESD部会を通しての他校とのつながりが深まってきている。

③企業とのつながり





ESD部会の研修を通してつながった、(株) 常磐植物化学研究所からローズマリーとツリーの木を寄贈していただき、授業で活用した。

(2) 機関包括型アプローチプロジェクトの取組

さらに、29年度から、**機関包括型アプローチ** プロジェクト(ホールスクールアプローチ)にも 参加しているので、今年度から防災教育にも力を入れて学校全体で取り組んでいる。

小学部、中学部、高等部それぞれの発達段階に 応じた内容を工夫して学習したり、「防災」につい て全校で共通の体験をしたりすることで、少しず つ防災教育等への意識が高まってきている。

<気候変動についての学習の様子>







気候変動について調べ、友達の前で発表したり、自分たち にできる地球に優しいこととしてグリーンカーテンを作っ たりする学習に取り組んだ。

<防災学習の様子>





「地震が起きた時にどのように身を守るか」ということを 考えたり、実践したりして、校内防災マップを作成した。





地震が起きたときに役に立つものや必要なことについて 調べて、掲示物にまとめたり、非常食を実食したりした。

<防災体験学習の様子>





起震車体験、煙体験、消火器体験を全校で実施。 実体験することで、より身近に感じ、考えるきっかけになった。





<全校避難訓練の様子>







年間で2~3回、地震や火災が発生した際の避難方法を全校児童生徒で確認。車椅子は校舎内の階段から、独歩は校舎外の非常階段から避難。

<避難所運営委員会・避難所開設訓練の様子>





学校周辺自治会、市役所職員、本校職員が集まり、避難所開設訓練を実施。千葉市防災備蓄倉庫の点検、HUGを用いての避難所想定、炊き出し釜を使用しての炊き出し訓練等を実施し、意見交換をした。





5 成果(○)と課題(●)

- ○ESDを「つながり」というキーワードで考える ようにしたことで、ESDに対しての校内の意識 が高まった。
- ○障害の有無に関係なく助け合って生きていくことができる共生社会を構築していくことが大切であるということが明確になり、「つながり」を大切にした活動を教育課程や授業、生徒会活動等に取り入れることができるようになってきた。
- ○高3生が卒業を控えて「この3年間で人とのつながりの大切さを感じた」と述べたように、「つながり」というキーワードを前面にだしたことで、児童生徒たちにもわかりやすくESDが伝わっ

てきつつあると思う。

- ○ユネスコスクールとして、多くの学校や企業との交流に取り組んだことで、積極的に自分のことを相手に伝えようという児童生徒の姿勢が育まれてきた。また、教員には自校での取組や児童生徒の活動を校外に発信しようという意識が高まった。
- ○H29年度から、小学部・中学部・高等部それぞれに複数名の教員をESDの係に配置し、校内でESDが広がり深まるよう、校内分掌体制を工夫した。それによって、より多くの人がESDに関わるようになり、各学部でESDの取組について考え、実行に移しやすくなった。
- ●児童生徒が企画し、取り組みたいと考えるESD の活動をより充実させていきたい。
- ●防災教育に取り組む際、学校が避難所になった場合、障害のある児童生徒達が、助けてもらうだけでなく、「自分たちにできることはどういうことがあるか」ということを考えていくことも必要な視点である。
- ●「気候変動」について、発達段階に応じた学習 内容を考え、各学部で取り組んでいけるよう工 夫する必要がある。
- ●特別支援学校ならではの多様性や障害の程度等を考慮したESDのあり方や実践について探究し、考えていく必要がある。重度重複障害の児童生徒にとってのESDとは、価値観の変容とは、どのようなことなのかについて学校全体で考え取り組んでいきたい。
- ●ESDに取り組んだことでの児童生徒の変容を しっかりと発信しなければならない。また、障 害の程度に応じた児童生徒の変容についても考 え発信していく必要がある。さらに、児童生徒 や教員の変容だけでなく、特別支援学校や児童 生徒に関わる周りの人々がどのような影響をう けるのかという変容についても考察していく必 要がある。

小 学 校 賞

東京都大田区立赤松小学校 校長 茂呂 美恵子

「心豊かで、主体的に活動する、

国際社会の一員としての自覚をもった子供の育成」学びを創る~ESDの充実を通して~

1. 研究のねらい

- ○教育活動のESDの観点での価値付け
- ○アクティブ・ラーニングの充実
- ○『価値観』を育む授業の創造

2. 主題設定の理由と概要

本校は新学習指導要領の理念を鑑み、ユネスコスクールの責務であるESDの充実に焦点を絞り、研究主題を「心豊かで、主体的に活動する、国際社会の一員としての自覚をもった子供の育成」と掲げ、質の高い学びの創造を目指して取り組んでいる。生涯を通じて行われるESDの基盤として、小学校教育では持続発展可能な社会を構成するための『価値観』と『体系的な思考力』の萌芽と伸長を促すことが重要である。そこで、まず教育活動全体を俯瞰し、育成してきた「生きる力」を『価値観』と『体系的な思考力』に視点を当てて整理した。(図1)

さらに、生きる力と体系的な思考力を計画的かつ系統的に育成するために、学年毎の『ESDカレンダー』や「ESD系統表」を作成し、実践と更新を行ってきた。そして、児童一人ひとりが身に付けた『価値観』と『体系的な思考力』を基に、児童自身がそれらを関連付け活用しながら自己を変容させていく教育活動を追究している。



図 1 価値観と体系的な思考力の整理と位置付け

※三重円全体が教育活動で育成する生きる力を示し、それらの中にESDで育むべき価値観と体系的な思考力が内包されている。

3. 実践事例:第3学年・算数

3-1. 単元名

あまりのあるわり算

3-2. 育てたい力









3-3. 単元の目標

- ・割り切れない場合の除法について理解し、除法 の意味についての理解を深めるとともに、それ を用いることができるようにする。
- ・日常の生活場面に照らし合わせて、それぞれの余 りの処理のよさに気付くことができるようにする。



3-4. 単元の指導計画(12時間扱い)

第1時:除数と商が1位数の除法で割り切れない 場合の計算の仕方を理解する。

第2時:余りと除数の関係を理解する。

第3時:等分除についても割り切れない場合の除 法が適用できることを理解する。

第4時:割り切れない場合の除法計算について、 答えの確かめ方を理解する。

第5時:割り切れない場合を含む除法の計算に習 熟する。

第6~8時:余りの捉え方について理解を深める。

第9・10時:学習内容の定着を確認し、理解を確実 にする。『算数ペディア』に取り組む。

第11・12時:日常生活場面に照らして考え、余りの処 理の仕方について多様に考える。【本時】

3-5. 本時の指導の工夫

持続可能な社会の『価値観』や『体系的な思考力』

- ●31人が5人まで乗れる車が9台あるという条件 法と9台全部を使って考える方法、または、車 の台数を最小限にするなど日常生活に照らして 多様な考え方を見付けられるようにする。また、 友達の考え方を知ることでいろいろな角度から の見方があるおもしろさを感じさせたい。
- ●自分の考えを相手に分かりやすく説明するため に、図や式、言葉などを用いて根拠を明らかに して発表する力を身に付け、自分の考えと比較・ ▲式と図、余りと図など児童の思考の手助けにな 検討し、よさや共通点を積極的に見いだせるよ うにする。
- ●車の乗り方の方法や結果を互いに読み取り、な ぜそのような乗り方にしたのかそれぞれの意見 をよく検討し、よさを味わい理解を深める。

興味・関心を高める工夫・問題解決活動の充実 <オープンエンドの問題の工夫>

31人の子どもたちが合宿に行きます。車1台に つき5人まで乗ることができ、車は9台まで用意 できます。あなたなら、どのような乗り方をしま すか。

<個に応じた解決方法の多様性>

本時の問題は、式を使って手際よく処理する児 童が多いと考えられるが、わり算で余りが出ると、 その先の処理を進められない児童も多く予想され る。そこで、式で考えることが困難な場合は、こ れまでの学習を振り返り、"図を描いて考えよう。" "おはじきなどを操作して考えよう。"と解決方法 の手段を児童自ら見いだしていく活動を重視した。

3-6. 成果(●) と課題(▲)

●自動車の台数という身近な題材で、オープンエ ンドの課題設定を工夫したことにより、多様な 考えを引き出すことにつながり、児童は意欲的 に取り組んでいた。

- ●算数科を通してESDを育む効果的な提案であっ た。特に、解決結果を日常生活と関連付け、人 間関係や省エネをはじめ、様々な視点で見直し、 その価値を深めることができた。初めて算数が 日常生活に生かせるということを実感したとい う児童も見られた。
- で車の乗り方を考えると、5人ずつで分ける方 ▲話し合いの場として、全体、ペア、グループ、『DY タイム』(友達の考えをノートや作品から黙って 読み取る活動)等、効果的な学びの形態を工夫 していく必要がある。そこで、相互に批判する(ク リティカルシンキング)ことで思考が深まり、 それが楽しさにつながる。また、理想論だけで なく、現実的に自分でもできるのかどうかを考 えさせていく。
 - るような導きが必要であった。

4. ESDを促進する校内環境

4-1. 赤松サイエンスワールド

児童の興味・関心を高めるため、算数や理科、環 境の観点で内容を吟味し、定期的に更新している。



4-2. 限りある資源 クリーンなエネルギー

落ち葉掃き→腐葉土作り→各栽培活動への活用 →落ち葉掃き→…のサイクルを通して資源の有限 性の理解を促している。



4-3. かけがえのない自然・生命

児童による動物飼育を円滑に実施するために、 獣医師と連携して、よりよい教育的効果を与える 環境を整備している。





4-4 共に生きる社会

国際理解教育や地域に住まう多様な方との交流 を通して、多様性の理解を促している。





4-5. 私たちの伝統 私たちの地域

130年を超える本校の歴史の中で受け継がれてき た伝統と地域を生かした学習を通して、愛校心と 地域愛、責任性の伸長を促している。





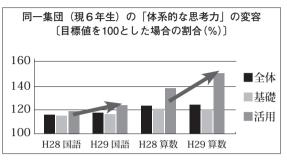
5. 成果

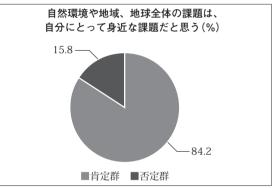
平成28、29年度の2年間、本校は大田区教育委 員会 教育研究推進校として、また、今年度より 東京都教育委員会「持続可能な社会づくりに向け た教育推進校しの指定を受け、「学びを創る~ESD の充実を诵して~」という研究主題を掲げ研究に 取り組んできた。持続可能な社会づくりを担う児 童に『価値観』と『体系的な思考力』を育成すべ く具体的な手だての検討と検証を行うことで、以 下のような児童の変容を得ることができた。

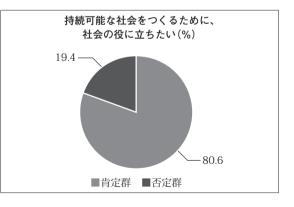
○児童の変容

今年度、本校における大田区学習効果測定の結 果は、4年生以上の全ての学年で、基礎力・活用 力ともに目標値(期待正答率)を上回っている。

また、「平成29年度持続可能な社会づくりに向けた 教育推進校 | に係るアンケート (第1回) からは、 この2年間の取り組みにより持続発展可能な社会 を構成するための関心や意欲の高さが読み取れる。 これらのことから、本研究を通して『価値観』と『体 系的な思考力』の萌芽と伸長が見られた。

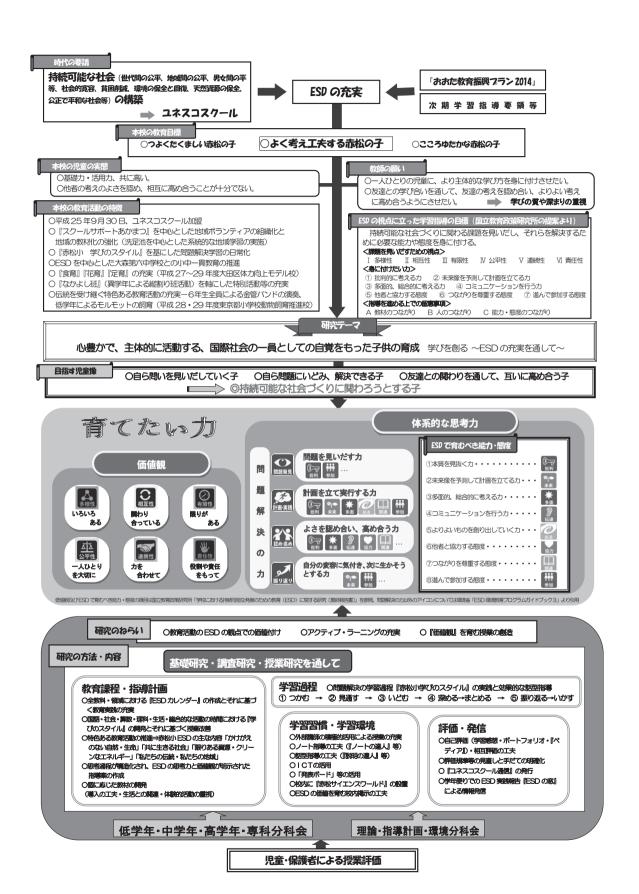




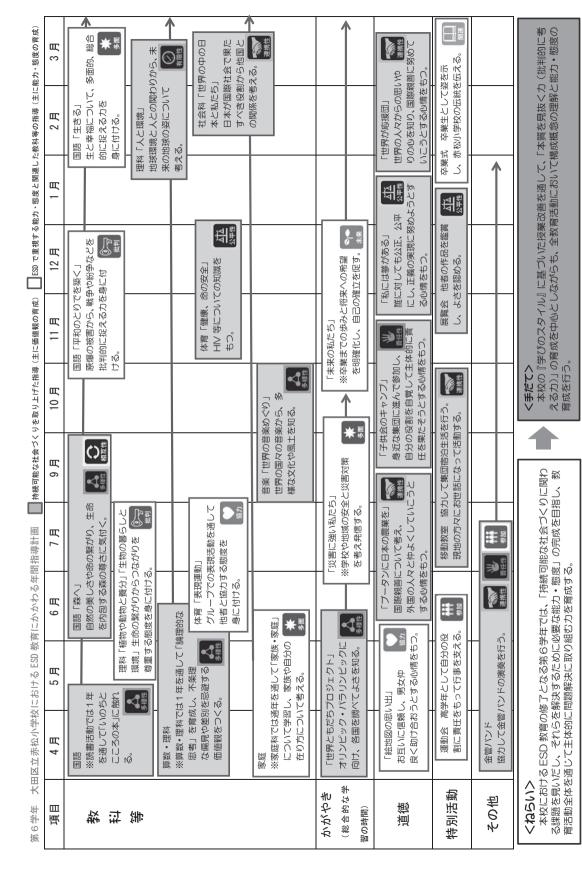


6. 課題

本研究を通して、児童一人ひとりに『価値観』と 『体系的な思考力』が身に付き始めている。今後も 実践と検証を積み重ね、児童自身がそれらを関連付 け活用しながら自己を変容させ、さらに「Think Globally. Act Locally | の視点で実践力を高めてい く教育活動を追究していくことが課題である。



18



19

的に製態度の

(批判 能力・無

に 関わ 数 数

能な社会づくのに の完成を目指し

中 学 校 嘗

埼玉県さいたま市立大宮八幡中学校 教頭 上続 昌司

ESD「持続可能な社会の担い手としての自覚を持った生徒の育成」 ~地球規模で考え、足もとから行動~

(1) 研究のねらい

本校は、人口約120万人を超える政令指定都市に ある全校325人の小規模校である。学校教育目標は、 「心豊かで たくましい 広い世界に生きる人間の育 成 | 〜好奇心こそすべての始まり〜 である。本 育の推准にも力を注いでいる。また、環境教育の 視点で学校ファームの活動にも力を入れている。 国際理解・多文化共生の視点で、学校外の講師を 招聘するなどの活動も取り入れている。その他、 地域行事への参加や連携を図った活動を行ってき ている。

そこで、これらの活動をESD (持続可能な開発 のための教育)の観点からまとめることで、地域 との絆を一層深めるとともに、地球規模の課題を 認識し、中学生として今何をしなければならない のかを知り、考え、行動することのできる生徒の 育成を目指している。具体的には、「人格の発達や、 自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと や「他人との関係性、社会との関係性、自然環境 との関係性を認識し、『関わり』や『つながり』を 尊重できる個人を育むこと |をねらいとしている。 そうすることによって、以下の①~④の力が育ま れるだろうと考えている。

- ① 持続可能な社会(未来)の担い手としての意識 を高めることができる
- ② 自分が世界とつながっていることを実感し、自 己肯定感や有用感を育むことができる
- ③ 地球規模で考え、身近な所に目を向ける態度 (Think Globally Act locally) を身につけること ができる
- ④ 広い視野で物事を考え、思いやりの心や協調性 が育まれる

(2) 実践研究の内容

本校のESDに関する取組は「地域・環境・人権 プロジェクト | と「国際理解・多文化共生プロジェ クト の2つから成っている。これらを、総合的 な学習の時間や普段の授業、学校行事や生徒会活 校は、IRC加盟校として長い歴史があり、人権教 動など、学校の教育活動全体を通して計画的に行 うことで、ESDの視点を身に付けた生徒を一人で も多く輩出していきたいと考えている。

- ①「地域・環境・人権プロジェクト」
- ・地域行事への参加

毎年、学区内にある社会教育施設「五反田会館」 の文化祭に参加し、3年生が合唱の披露を行って いる。歌い終わった後は温かい拍手をいただき、 利用されている方々との交流を深めることができ、 積極的な地域行事への参加の成果が感じられた。 また、小中一貫連携校である大谷小学校の「大谷 小PTAフェスタ | にボランティアとして生徒会を 中心に参加し、吹奏楽部の演奏も行った。



- ②「国際理解・多文化共生プロジェクト」
- ・IRC活動の継続

20

IRC加盟登録校として毎年4月に新入生の認証 式を行い、IRCの意義を理解しメンバーとしての 自覚を促している。特に新入生は、JRCの意義や 活動について興味をもち、中学生として「知る事、 考える事、行動する事 | の大切さを学んだ。



・ユニクロのCSR(企業社会貢献活動)「服のチカ ラプロジェクト への参加

毎年、学区内に店舗のある「ユニクロ」の社会 貢献活動「服のチカラプロジェクト」(着られなく なった子ども服などを集め、難民キャンプに届け る活動)への参加協力を続けている。本年度は、 生徒会誌や学校便り、合唱コンクールでも保護者 や地域の方々に呼びかけ、子ども服回収活動を進 めてきた。継続して実施している社会教育施設や 近隣の小中学校への協力依頼、地域行事に参加す る際にも協力を依頼し、毎年3,000着程度の子ども 服を集めている。



・NGOネットワークINNE「世界一大きな授業」 全校実施

今年度も4月に「世界一大きな授業 |を実施した。 特に、1年生は、この授業を通して「ESD」につ いて関心を高め、持続可能な開発のための取組に ついて、理解する機会となった。参加型アクティ ビティを通じて、世界の現状を知り、マララ・ユ スフザイさんの国連でのスピーチを通し、より良 い世界にするために活動している子どもがいると いうことを知り、中学生として今何をしなければ ならないのかを考える授業としている。

21



・IICA (国際協力機構)「世界の笑顔のために」 プログラムへの参加

IICA「世界の笑顔のために」プログラムへ毎年 参加している。このプログラムは、小学校卒業以 来使わなくなった「算数セット」や「鍵盤ハーモ ニカーなどを回収し、必要としている国々に提供 する活動に協力している。集めた物品は青年海外 協力隊員により、セネガルやコロンビアなど10か 国以上に送られ、その品を実際に使っている写真 やお礼状が現地から送られてきている。



・「留学生が先生」プログラムを活用した国際理解 教育(3年)

国際理解支援協会の「留学生が先生」プログラ ムを活用した授業を3年生で実施している。本年 度は、韓国、ハンガリー、ブルガリアの留学生が 来校した。それぞれの国の特徴をより表現するた めに、講師は民族衣装を身に着け、歴史や言葉、 日本との違い等を中心に授業を行った。また、生 徒との交流も行い、有意義な時間を過ごした。事 前学習として歴史、言語、地理、環境、食物、日 本とのかかわりについて調べ、留学生の前で発表 し掲示している。



・八幡ファーム 育てた作物の給食への活用(フー ドマイレージの意識醸成)

環境委員会や自然科学部の生徒を中心に、校内 にある「八幡ファーム」で野菜を育て収穫している。 八幡ファームでは、じゃがいもや大根、トマト、きゅ うり、長ネギ、茄子など、年間を通して様々な野 菜を栽培、収穫している。収穫した野菜は学校給 食に提供している。地産地消やフードマイレージ の意識醸成にも役立つ活動となっている。



生徒会主催の人権朝礼

毎年、世界人権週間の時期に合わせて、人権朝 礼を行っている。人権朝礼では、生徒会が中心と なって、「いじめ撲滅」のためのムービーを作成し 全校で視聴している。本年度も、新役員が新たに 作成したムービーを全校で視聴し、人権について 個々の課題と捉え深く学ぶ機会となった。



人権講演会

人権朝礼と共に、毎年人権講演会を行っている。 本年度は、「大宮八幡中人権の日」と題して主に 「LGBTにおける課題やジェンダー」について講師 を招いて講演会を行った。講師の今までの経験から 話された貴重なメッセージを、一人ひとりが真剣に 受け止め、人権について深く学ぶ機会となった。



・祈りづるプロジェクト (全学年)

今年度新たな取組として「祈りづるプロジェクト」 に参加した。原爆の子の像のモデルとなった佐々木 禎子さんがユタ州の博物館にサダコの鶴を寄贈する 際に、350万羽の祈りづるを合わせて寄贈する趣旨 を理解し、ユネスコスクールへの意識を高めること ができた。一羽一羽丁寧に思いを込めて作成してい る生徒の姿が、とても印象に残る取組となった。



・ディレクトフォース(企業退職者の社会貢献団 体)を招いての環境教育(1年)

毎年「ディレクトフォース」から講師を招き、 世界が抱える環境問題などについて、講師自身が 実践してきたことを中心に授業を実施している。 授業を行う際には、事前学習を行い、生徒が調べ た内容をもとに壁新聞を作成している。リサイク ルや環境破壊など身近な問題をわかりやすく説明 してもらい、これから何をするべきか考えるきっ かけとなっている。



・新聞記者を招いての講演会 (2年)

毎年新聞記者を招いての講演会を行っている。 本年度の講演会は「新聞記事を正しく読み取り生 活に生かすしというテーマであった。世界で起き ている様々なニュースや記事、多くの情報を正し く読み取ることで、課題を見出し、中学生の今、 何を考え、何をすべきかを学び、視野を広げる貴 重な機会となった。

その他の「地域・環境・人権プロジェクト」に関 する取組の例

- ・学区内社会教育施設館長による人権講演会
- ・地域50事業所の協力を得ている職場体験学習(1年)
- ・学区内幼稚園との共催で行う幼児触れ合い体験(3年)
- ・燃料電池から環境を考える東京ガス出前講座 (1年)
- ・小中一貫モデル校
- ・難民支援活動についてのユニクロ講演会
- ・盲人福祉施設ひとみ園への協力
- ・地球温暖化の中での熱中症を考える健康講座
- ・蓮田特別支援学校との定期的な交流学習



・NIE教育の実践 平成28・29年度埼玉県NIE推進 協議会実践指定校

・ESDについて学ぶ講演会

校内ESD研修の講師でもある拓殖大学国際学部の 石川一善先生を招き、「ESDってなんだろう」とい うテーマで講演していただき、中学生にもわかり やすくESDを学ぶ機会を作っている。



その他の「国際理解・多文化共生プロジェクト」に 関する取組の例

- ・文科省選定作品、国際理解のためのVTR「世界 の果ての通学路 | の全校視聴
- ・開発教育協会等の教材を活用した参加型学習の実施
- ・ふれあい芸術鑑賞会(音楽・古典・演劇・写真家)
- ・修学旅行、校外学習(ESDを意識した活動)
- ・ユニセフリーダー講座への参加



③その他の取組

23

・ESDカレンダー

本校ではESDカレンダーを学年ごとに作成して いる。教科を横断してESDの取組を行うために作 成したもので、どの教科がいつどんな分野でESD に関わる授業を行っているかを示している。下記 の1学年のESDカレンダーでは、黄色が「国際理解」 に関する授業を表している。5月に「世界一大き な授業 | を実施する際、「4月に社会科の授業で世 界の様々な地域について学習したこと | を導入で さいたま市で行っている「夢工房 未来(みら) 用いることができる。理科で環境問題、家庭科で くる先生 ふれ愛推進事業」として、本校の職員の 食育など、その教科だけ単発で終わるのではなく、

教科横断的に学校全体でESDに取り組むために活等に参加し、我々教員も指導力向上に努めている。 用できるカレンダーとなっている。



・ESDの概念を取り入れた授業と指導案

本校では、各教科の日々の授業でもESDの概念(「6つの構成概念」と「7つの能力・態度」)を取 り入れている。この指針は、平成28年3月に文部 科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会より 示された「ESD推進の手引き」に記載されている もので、本校で行う授業についての指導案を作成 する際も掲載することとしている。

指導案に載せている表

・授業に関連のある項目に○印をつける

- 持続可能な社会づくりの構成概念 -

I 多様性	II 相互性	Ⅲ 有限性
(いろいろある)	(関わり合っている)	(限りがある)
Ⅳ 公平性	∇ 連携性	VI 責任制
(一人一人大切に)	(力を合わせて)	(責任をもって)

-ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度-

① 批判的に 考える力	② 未来像を	③ 多面的・	④ コミュニ
	予測し計画を	総合的に	ケーションを
	立てる力	考える力	行う力
⑤ 他者と	⑥ つながりを	⑦ 進んで	
協力する態度	尊重する態度	参加する態度	

· 校内研修

生徒にESDに関する授業を行うためには、教職員 がESDに関する知識を理解し深めなければならな い。そこで毎月1度、定期的にESD研修の機会を設 けている。拓殖大学の石川一善先生を招き、参加型 の研修など通してESDについて指導していただいて いる。ファシリテーターとしての心構えや生徒たち にESDの概念を深めるためにどんなアプローチをし ていったら良いかなどを教わり、実践に生かしてい る。また、長期休業等を活用して、開発教育協会が 主催する「教材体験フェスタ |や「ユニセフセミナー |



・ふれあい鑑賞会

今年度は、写真家の松本紀夫さんを講師として 招き、「アラスカフォトライブ」を鑑賞した。アラ スカの大自然を写真や動画で紹介し、手つかずの 原野をフィールドに単独での撮影を通して、感動 と夢を追う幸せを伝えてくれた。ユーモアを交え た話の中に、「1度しかない人生を自分の好きなこ とに費やすことの意味 | を生徒に語りかけ、同席 していた保護者や教師にも多大なる影響を与えた。 アラスカの大地こそ、地球温暖化が進んでいるこ とが顕著に表れ、豊かな自然や動物たちの危機が 迫っていることも痛感することができた。この鑑 営会を诵じて、50年後、100年後の未来に今の地球 を残していくために、何をすべきかを改めて考え る貴重な機会となった。

(3) 終わりに

本校では、教職員がESDについていろいろな機 会を通し「一人ができること、その力は小さいが、 何もしなければ何も始まらない。まず自分にでき る小さなことを始めること、それがすべての始ま りになる。踏み出した小さな一歩が実は世界につ ながっており、未来を変える可能性がある。そう した視点を持って、毎日生活していってほしい。| という意識を共有し、折に触れ生徒に話している。

今後も、大宮八幡中学校では、SDGsの周知と達成 のためESDに関わる活動の継続発展を目指していく。

高 等 学 校 賞

神戸大学附属中等教育学校

研究部主事 グローバル教育推進室長 岩見 理華

「地球の安全保障」をテーマとしたグローバルキャリア人の育成

1 本校ESDの「ねらい」

本校は、「グローバルキャリア人」育成を教育目 活躍・貢献できる生徒の育成をめざしている。 ESDは本校の教育目標を達成する上で重要な柱で あり、また次期学習指導要領でもその実践が強調 されていることから、中高一貫教育の全教育課程 (教科、総合学習、特別活動、課外活動等) に位置 付け、本校教育改革の原動力として取り組んでい る。なお、本校は平成27年度からスーパーグロー バルハイスクール(SGH)の指定を受けており、 SGH事業との連関を図りながら、ESDを推進して いる。

2 実践内容

実践内容は多岐にわたるが、ESDに直接関わる 典型的な取組について紹介する。

2.1 教科横断的特設授業の設置

ESD推進のため中高一貫教育の充実期にあたる 3・4年生で社会科・公民科の時間を利用し、教・「日本の食料廃棄及び貧困を解決するために 科横断的な授業「ESD | 「国際理解 | を特設している。

- ・3年「ESD」は、社会科教員が中心となって家 庭科・理科・情報科・英語科教員が連携して「環 境」「水」「食」「資源・エネルギー」「情報化社会」 等をテーマに、生徒の調査・討論・発表活動を 重視した学習活動を展開している。
- ・4年「国際理解 | は、「移民 | 「気候変動 | 「平和 | 等をテーマに、公民科教員が他教科の教員の協 力を得て、模擬国連方式の学習を取り入れ、地 球的課題を探究している。
- ・同時に、次期学習指導要領の方向性を踏まえ、 上記特設科目と連動させながら、各教科でESD 実践を准めている。

2.2 課題研究論文の執筆

「地球の安全保障」を全体テーマとして、5、6 標に掲げ、地球的諸課題を踏まえながら国際的に 年生では多数の生徒が ESDに関連した領域のもと で個人研究に取り組み、18.000字以上の論文にま とめ発表している(資料1)。

> ・1~4年では、リサーチリテラシーの系統的育 成を図り、上記課題研究の基礎を培っている。

資料1:「課題研究論文テーマ」

<防災・減災>

- ・「学校におけるこれからの防災教育のあり方 - 双方的な防災教育は生徒の防災意識を高め ることができるのか--
- ・「神戸市の小中学生における減災教育のあり方と は-減災アクションカードゲーム神戸版の開発 から考える - |
- ・「東日本大震災におけるダークツーリズムの有用 性-大川小学校を事例に--

<食・健康>

- ・「コンビニエンスストアの食材の危険性 添加物 から危険性を解析する - |
- フードバンクを通して |
- ・「子どもの貧困から考える子どもにとっての食事と教 育のあり方-子ども食堂の役割と今後のあり方-|

<気候変動>

- ・「局地風が都市の気温に及ぼす影響 六甲おろし を事例として一
- ・「神戸市における冷気流と広域陸風が相互に及ぼ す影響の解析 |

<環境問題>

- ・「経済地理学的視点からみた持続可能な鉄道のあ り 方 - 第三セクター鉄道の出資比率別考察 - |
- ・「生物から学ぶバイオミメティクスーバイオミメ ティクスの活用 - |

・「閉鎖環境下でのミドリムシの長期飼育-地球共 り継続して取り組んでいる(平成26年度は住吉校 生循環のモデルを目指して-|

<国際理解>

- 受け入れない国--
- ・「神戸におけるユダヤ人難民 第二次大戦期にお ける動向について-|
- ・「台湾における日本の植民地教育の考察 日本統 治下の公學校修身書(台湾)と尋常小學修身書(日 本)を比較して-|

<平等・教育>

- ・「待機児童問題の解決に向けて-認定こども園を めぐる課題と神戸市の待機児童解消策の提案 - |
- ・「児童期の運動遊びはどのような影響を及ぼすの か-ここ10年での子どものあそびの変化--

2.3 ESD国内外体験交流活動

「グローバル&ローカル」な視点を取り入れ、以 下のESD国内外体験交流活動等を展開している。

I アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト (IIME: International Intercultural Mural Exchange) (文部科学省・外務省後援事業)

「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェク ト(以下、アートマイル) は、海外の学校とICT を活用して共通のテーマで協働学習を行い、学習の 成果として1枚の壁画(1.5m×3.6mの大型絵画)を 共同制作する国際協働学習の事業である。また、アー トマイルはユネスコから「平和の文化10年プロジェ クト」として認定され、世界125カ国から約50万人 が参加しているグローバルプロジェクトである。

(1) 目的

本プロジェクトは、日本の子どもたちと海外の 子どもたちをインターネットでつないで、文化的・ 歴史的背景が違う海外の子どもたちと共通のテー マで協働学習を行い、学習成果として壁画を共同 で制作する国際協働学習を通して日本人として自 分の国の伝統文化に誇りを持ち、グローバルな広 い視野を持って、自ら考え行動し、世界の人々と 協働して世界の調和と平和に貢献する次世代を育 てることを目的としている。本校は平成26年度よ

舎3年生全クラス、平成27年度より毎年有志生徒 30名程度が参加)。

・「難民・移民問題の現状と展望 - 受け入れる国と (2) アートマイルの交流相手校とESDのテーマ

年度	相手国	交流校名	ESD の テーマ
	タンザニア	Kilakala Secondary School	エネルギー
平成 26	台湾	南栄国民中学	環境
平成 26 メキシコ			世界遺産
平成 27	フランス	Le likés	水資源管理
平成 28	インドネシア	SMALab School Cibubur	平和
平成 29	インドネシア	SMP Islam Tugasku	歴史を通した 開発と景観

(3) これまでの作品



写真1:「エネルギー」(タンザニア)



写真2:「環境」(台湾)



写真3:「世界遺産」(メキシコ)



写真4:「水資源管理」(フランス) ※パリのユネスコ本部に展示



写真5:「平和」(インドネシア)

(4) 成果と課題

平成29年度で4年目の参加となる本事業は、前 年度参加生徒からノウハウの継承もなされ、壁画 の構図や色塗り作業については大変スムーズに行 えるようになってきた。Skype会議で相手と直接 交流する体験は生徒たちの英語によるコミュニ ケーションや異文化理解に対する意欲の向上に大 きく貢献している。前記(2)のとおり、本校は毎年 ESDの分野を共通テーマとして取り組んでいる。 今後はいかに交流相手校の生徒と「持続可能な開 発しについて学びを深めていくかが課題である。

Ⅱ 震災 (Disaster)・復興 (Reconstruction)・ 減災 (Reduction)・レジリエンス (Resilience) をテーマとした宮城交流プログラム(DR3プ ロジェクト)

(1) 目的

被災地体験を共有する神戸市と宮城県の高校 生・大学生が交流しながら、大規模震災に対する リスクマネジメントについて多角的な視点から学 ぶ。具体的には、①身近な地域に起こった、ある いは今後起こるであろう自然災害について共に学 ぶ。②震災遺構見学や語り部講話などを通して震

災の記憶をどのように後世に伝えていくかを共に 考える。③津波堆積物ボーリング調査などを通し て、自然科学的研究手法から震災を捉え、理解する。 ④上記活動を通して、他を思いやることのできる 生徒を共に目指す。

- (2) 対象生徒 4~5年生、のべ130名程度
- (3) 連携機関 仙台市立仙台青陵中等教育学校、東 北大学東日本大震災ボランティア支援(SCRUM)、 リーディング大学院、災害科学国際研究所、宮城 県多賀城高等学校、宮城県古川黎明中学校・高等 学校 、復興庁、宮城復興局、宮城教育大学、東京 大学地震研究所、神戸市立渦が森小学校、神戸市 教育委員会

(4)活動の様子



写真6:復興庁での意見交換

(5) 成果と課題

平成28年度は1年間を通じて、本プログラムに のべ128名の生徒が参加し、多くの体験・経験を積 むことができた。また、少しずつではあるが被災 地で学んだことを地元の神戸に還元することも実 現できた。本プロジェクトへの参加を契機に防災・ 減災に関心を持ちさらにそれを深めるべく自身の 課題研究のテーマとして設定した生徒も多数おり、 本活動が課題研究とも密接な関わりを持ったもの に近づいたと言える。一方で、本プログラムを主 体的かつ継続的に運営していくことのできる生徒 の育成が今後の大きな課題である。

Ⅲ ジオパーク交流事業 (GEP)

山陰海岸ジオパークをフィールドとした鳥取環 境大学・鳥取県立岩美高等学校との交流プログラ ム「多様な地形・地質・風土と人々の暮らし-神 戸と山陰海岸の違いに着目して-」を展開した。

(1) 目的

催された第38回ユネスコ総会において、これまで 題について、国内・海外の学校と協働学習を行う ユネスコの支援事業として行われてきた世界ジオ パークネットワークの活動が「国際地質科学ジオ パーク計画 | として世界遺産と同じユネスコの正 付け、多様な文化や考え方が存在することを学び、 式事業となった。このような背景のもと、兵庫県 に位置する山陰海岸ジオパークの貴重な自然・風 土を活かし、以下の4点を達成することを目的と (2)対象生徒 1年生~5年生 約40名 する。①フィールドワークを中心とした自然科学 (3)「食」に関するグローバルな問題との関連性 的・人文科学的研究手法の基礎を修得する。②公 (A)食文化:食牛活の変化が人々の健康に及ぼす 立鳥取環境大学・岩美高等学校と連携し、現地の 大学生ならびに高校生と交流・合同フィールドワー クを実施することを通して、山陰海岸ジオパーク の貴重な自然・風土を学ぶ。③太平洋側の神戸と 日本海側の山陰海岸における気候・風土・歴史の 違いを学ぶ。④山陰海岸ジオパークの貴重な自然・ 風土について学ぶことを诵して、地元「神戸」に 対する郷土愛や誇りを醸成する。

- (2) 対象生徒 4~5年生、のべ10名程度
- (3) 連携機関 山陰海岸ジオパーク推進協議会、公 立鳥取環境大学、鳥取県立岩美高等学校

(4) 成果と課題

平成28年度は、2回の現地訪問と交流活動を通 じて、山陰海岸ジオパークの自然科学的側面と人 文科学的側面の両面を学ぶことができた点である。 (4) 成果と課題 しかし、神戸から山陰海岸ジオパークまでの移動 時間が現地での活動時間を圧迫してしまう面もあ に驚き、途上国の飢餓の現状や食品ロスや過剰生 り、現地における活動に十分な時間を充てること 産が引き起こす資源の枯渇、環境破壊などの現状 ができなかった点は残念である。平成29年度は、から、強い課題意識を持ち、この現状を変えるた その反省を踏まえた計画を検討し、さらに発展的 めに自分ができることを模索し行動しようとして なプログラムとなるよう努めている。

る持続可能な生活と社会

(1) 目的

年度文部科学省委託事業日本/ユネスコパートナー と行動の変革をもたらすこと | がある。本プロジェ シップ事業の国際協働学習プロジェクトから継続 クトの活動を通して、生徒たちの中から意識と行 して実施している。「食」とそれを取り巻く状況は、動の変容がみられたのは、大きな成果であると考 生物多様性や気候変動、食の安全、消費、伝統文 える。今後も社会科、家庭科、食育等で教科構断

化など経済、環境、社会、文化など多彩な切り口 2015年11月17日、フランスのユネスコ本部で開が考えられる豊かな題材である。「食」に関する課 ことを通して、問題解決力を養い、国際的な視野 を含む多様な価値観から意思決定する能力を身に 批判的思考力や創造的思考力、長期的に物事を考 える力を養うことを目指す。

- 影響。日本では食の欧米化の影響を受けて脂 質の過剰摂取による生活習慣病の増加が懸念 されている問題。家族構成や生活スタイル、 嗜好の変化にともなう人々の食生活の変化 や、生産・消費の関係から昔から地域で受け 継がれてきた食事(伝統食、郷土料理)の継 承が難しくなっていること。
- (B) 生産消費サイクル:日本は食糧自給率が低く (40%)、食料品の多くを外国からの輸入に頼っ ているが、その食料廃棄率も高い(約26%~ 47%)という現状がある。食料輸入をしてい る先進国は自給率を上げるとともに廃棄率を 減らし、発展途上国でも自国のために食料を 多く生産することが必要であるということ。

「フードバンク関西」を訪問し、食品ロスの現状 いる生徒がいた。また、後期課程(高校)の生産 消費サイクルで扱っている食料廃棄の問題の学習 N ESD Foodプロジェクト「『食』を通して考え 成果が、前期課程(中学)の生徒にも波及し、文 化祭で「フード・ドライブ」活動を行った。

ESDの目標の一つに「環境、経済、社会の面に 本校では、本事業を「食」をテーマとした2016 おいて持続可能な将来が実現できるような価値観 的教育ができればよいと考えている

3 本校ESDの成果・課題・展望

本校ESDの成果と課題について、本校がめざす グローバルキャリア人育成の視点から小括する。

1 主体的に深く学ぶ力について

科等の主題学習を幅広く展開することで育成を 校で「減災カードゲーム」を紹介するなどの社会 図っている。全員が論文を執筆する課題研究は、 テーマの社会的意味や研究手法、情報収集や資料 批判、論文執筆時の引用ルールや制約と苦闘する など、全研究過程で自らの思考力・判断力を総動 定である。 員しなければならない仕組みになっている。本校 では、1回生より4年間、全員が論文を提出して 4 自分の成長や健康を考え、行動する力の育成 おり、意識調査結果からも多面的思考力の上昇が 確認されている。課題は、論文の質をどう高めて いくかである。そのためには、教科等の学習(特 「ESD Food プロジェクト」である。同事業は、 にESD関連内容)との関係性及び指導体制の確立 が求められている。教材レベルでの連関性を重視 したカリキュラム編成等を行う予定である。

2 他者を尊重し、自分の役割を理解する力の育 成について

「アートマイル」の取組など体験交流活動の分野 で顕著な成果が上がっている。「アートマイル」は、れた。課題は、「健康と食」を教育課程全体の中に 巨大壁画を学習の成果物として、文化的背景の異 なる海外の生徒と協働学習を行い、互いの文化理 と連携した「ヘルスプロモーション部会」を立ち 解を深め、共に国際的課題解決を探究する取組で 上げ、カリキュラム開発を行っている。 ある。生徒は「平和」や「資源」等のテーマに対 する互いのとらえ方の違いを学びながら相互理解 を深めている。単なる文化交流を越えた協働作業 ゆえに実現したといえる。課題は、現在実施中の 国内外の体験交流活動の改善に加え、他の教育分 野においてどう深化させるかにある。事前・事後 学習の効力を検証すると共に、体験の質的改善を 図る計画である。

3 自分の夢や希望をもち、それに近づくために 行動する力について

顕著な成果が上がっているのが、「震災・復興・

減災宮城交流プログラム」である。同事業は、被 災地体験を共有する神戸市と宮城県の高校生・大学 生が交流しながら、大規模震災に対するリスクマ ネジメントについて多角的な視点から学ぶ取組で、 震災体験の聞き取り、津波堆積物ボーリング調査 や復興庁訪問等を実施している。また、参加生徒 は「復興・減災」を通して災害に強いまちづくり 「地球の安全保障」をテーマとする課題研究や教 の一翼を担いたいとの高い志のもと、地元の小学 貢献活動を行った。課題は、同事業に限らず、こ うした貢献活動をどう広げるかにある。ESD活動 参加者間の交流、後輩への報告会の充実を図る予

について

ESDとの関連で特に成果が上がっているのが、 国内(広島、群馬)・海外(インドネシア)の学校 と、「食」に焦点を当てた持続可能なライフスタイ ルをテーマに、インターネットを用いた協働学習 を行い、その成果を発表するものである。参加生 徒の中からは、「子ども食堂」や「フードバンク」 について課題研究に取り組むと共に、自発的にフー ド・ドライブ活動を行うなど、行動の変容がみら どう位置付けるかという点にあり、現在神戸大学

ベスト・アクティビティ賞

北海道札幌平岸高等学校 教諭 吉岡 隆

円山動物園と連携したデジタル絵本の制作と読み聞かせ活動

1 はじめに

単科の札幌市立高等専門学校がデザイン学部へ移 行したことで生徒募集停止となった。そのため、 市立高専を希望していた中学生の受皿として全日 制普通科にデザインアートコースが1間口開設さ れた。

2 実践までの経緯とねらい

デザインアートコースでは、2008年に札幌市円山 動物園と連携し、動物園の動物をモチーフに「札幌 平岸高校デザインアートコース×円山動物園環境 メッセージPodcast を制作・発信した。また、動 物をモチーフにした80種類のエコバックを生徒たち が制作し、円山動物園の動物科学館で展示、来園者 に販売し、動物の餌代として寄付をした。また、北 海道洞爺湖サミットのロゴマーク募集では、優秀賞 となり、総理大臣官邸において表彰された。



▲北海道洞爺湖サミットロゴ表彰式

これらの活動により、2009年に第1回さっぽろ環 境賞の環境保全・創造部門優秀賞を受賞した。

また、2010年には、札幌らしい学校教育キャラ

クターをデザインアートコースの生徒がデザイン 北海道札幌平岸高等学校は、開校38年目の札幌 し、「雪」の教育キャラクター「ゆっぽろ」、「環境」 市立高等学校である。2005(平成17)年4月に札 の教育キャラクター「ちっきゅん」、「読書」の教 幌市立大学が開学し、インダストリアルデザイン 育キャラクター「おっほん」は、幼稚園、小学校 の子供達に親しまれている。



▲札幌らしい学校教育キャラクター

さらに2010年には、第8回民家の甲子園全国大 会において、増毛町の旧商家丸一本間家と国稀酒 造をテーマにしたプレゼンテーションを行い全国 優勝、2011年には栗山町の小林酒造をテーマに2 年連続優勝を果たした。また、この年から札幌ユ ネスコ協会の私のまちのたからもの絵画展に民家 の甲子園の作品パネルを展示協力した。

2012年には、小樽の青山別邸と茨木家中出張番 屋を授業で取材した時の作品「鰊(ニシン)漁が作っ た歴史」が、日本ユネスコ協会連盟の第4回私の まちのたからものコンテストで優秀賞を受賞、 2013年には第5回私のまちのたからものコンテス トにて、鰊番屋で開催された食育教室「週末食育 番屋」を取材した作品「ニシンのまちに受け継が れてきたもの」で最優秀賞である日本ユネスコ協 会連盟賞を受賞した。また、アマゾンより「週末 食育番屋」の電子書籍の写真集を出版した。



▲週末食育番屋表紙

2006 (平成18) 年から授業の一環で「さっぽろ 雪まつり | の中雪像を毎年制作しているが2012年 には、札幌の姉妹都市、アメリカ合衆国ポートラ ンドのグラント高校と雪像の共同制作を行った。 2013年には、ポートランドの児童生徒の日本語教 材として、日本の昔話などのデジタル絵本を制作 し、スカイプを使って交流を行った。



▲ポートランドとのスカイプ交流

週末食育番屋とポートランドの日本語教育用デ 践事例となった。

2013年度から日本ユネスコ協会連盟の世界寺子 屋プロジェクトリーフレットコンテストに参加、 第66、67回さっぽろ雪まつりでは、世界寺子屋プ ロジェクトの中雪像を制作し、会期中雪像前で募 金活動を行った。



▲さっぽろ雪まつり雪像と墓金活動

2015年にユネスコスクールへの加盟申請が認可 され、日本ユネスコ連盟の第2回高校生カンボジ アスタディッアーに3年生の男子生徒が参加した。 2016年には、日本ユネスコ協会連盟の世界寺子 屋プロジェクト・リーフレットコンテストにおい て、最優秀賞を受賞した。



▲リーフレット最優秀賞作品

昨年度の円山動物園のデジタル絵本の実践では、 ジタル絵本の活動は、ユネスコスクールの優良実 円山動物園の動物をモチーフにした小学生向け環 境教育用のデジタル絵本の制作を通して、生徒た ちに環境問題について関心を持ってもらうことを ねらいにした。

3 実践内容

デザインアートコースの授業の一環で、札幌市 円山動物園を取材して、円山動物園の動物と札幌 市環境教育キャラクターの「ちっきゅん」を主人 公とした小学生を対象にした環境教育デジタル絵 本の制作を動物園の飼育員の指導のもとに行い、 絶滅危惧種などの動物を通して、環境問題につい て生徒の興味関心を高める。

3.1 デジタル絵本の制作と読み聞かせ

(1) 動物園での取材と絵コンテ制作

円山動物園を取材して、ハイエナ、オランウー タン、ホッキョクグマ、アムールトラの4種類の 動物を取り上げて絵本を制作することにした。



▲動物園職員からの説明



▲絵コンテ

グループであらすじを考え、絵コンテの制作を 始める。絵コンテは、動物園の飼育員の添削を受 けてから絵本の各ページを分担して制作した。

(2) 絵本の内容と構成

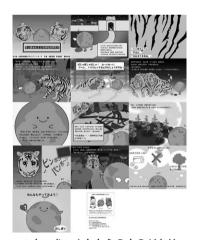
環境教育キャラクター「ちっきゅん」が円山動 物園を訪れて、動物達と交流してその動物達の生 息環境などを学習する内容となっている。



▲ちっきゅんと円山動物園のハイエナくん



▲ちっきゅんとホッキョクグマのリラ



▲ちっきゅんととらのものがたり



▲ちっきゅんとオランウータンのハヤト

動物園のデジタル絵本は3年生が4冊、2年生 が同じ動物で3冊を制作した。

小学生3、4年生向けに制作しているため、漢字にはふりがなをふり、かなだけの場合は、分かち書きにして読みやすように工夫をした。

(3) 電子図書館と小学校での読み聞かせ

完成したデジタル絵本は札幌市電子図書館より 貸出を開始(現在は誰でも閲覧可能)し、市民が 自由に閲覧できる他、札幌市立西岡小学校の3年 生に読み聞かせを行った。



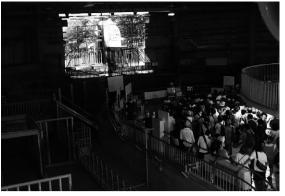
▲小学校での読み聞かせ

3.2 動物園マナーCMとプロジェクションマッピング

(1) 動物園マナーCMとプロジェクションマッピング 円山動物園の見学マナーCMの制作を行い、夜の 動物園で発表会を行った。また、新しいゾウの獣 舎建設のため、取り壊しとなった熱帯動物館にお いて、熱帯動物館の動物達の思い出を振り返るプ ロジェクションマッピングを制作し、夜の動物園 において披露した。



▲見学マナーCM発表会



▲熱帯動物館でのプロジェクションマッピング

3.3 環境イベントでの読み聞かせとライブアート (1) 生物多様性デジタル絵本の読み聞かせ

今年度は、授業で生物多様性のデジタル絵本を制作し、7月に札幌市電子図書館から貸し出しを行い、9月2日に地下歩行空間北3条広場において行われた「人とペットの暮らしひろば2017」において、円山動物園のデジタル絵本と生物多様性デジタル絵本の読み聞かせを行い、地球環境や生物多様性について、デジタル絵本を通して一般市民や子供達に関心を持ってもらうことができた。



▲人間と動物の共生社会のライブアート

同じく、この催しで、デザインアートコースの 2年生がライブアートの制作を行い、人と動物の 共生へのメッセージ壁画アートを制作し、通行す る人々から動物へのメッセージをかいてもらい、 壁画の一部として取り込んだ。完成したライブアー トは、札幌市動物管理センターへ展示することに なった。

4 地域と連携した課題解決学習

今回の取組では、動物と人間の共生社会がテー マなので、人間の都合だけで森林資源の伐採や開 発による環境の変化がどのように動物達の生息環 境に影響を与えてきたのか、動物園での取材や飼 育員から話を聞いて知ることができた。

環境教育用の絵本を制作する上で、科学的な根 拠や動物の生態は非常に重要で要素である。シナ リオや絵コンテを制作していく際に動物園の飼育 員のアドバイスや添削を受けることによって、子 供達に何を伝えなければならないかを考える際の 大きな指針となった。また、どのように表現すれ ばより親しみやすく伝えられるか考えることも絵 本の制作では非常に重要であった。

5 まとめ

ESDの活動を通して、自分たちの環境や他の生 物たちの共生を考えるきっかけとなり、生徒も自 主的に活動に参加していた。

また、今回の活動は第8回ESD大賞への応募と ともに第9回さっぽろ環境賞においても最優秀賞 である札幌市長賞を受賞することとなり、札幌市 の環境教育の実践としても高く評価された。

生徒たちは、人間も動物も健康に共生できる社 会を目指すために身近な活動として、動物園と連 携したデジタル絵本と読み聞かせ、ライブアート の制作に取り組んできたが、長い制作期間にもか かわらず、最後まで取り組めたことは飼育員のア ドバイスや共同で制作した生徒同士で活動してき たことが大きい。

今後もデジタル絵本の制作と読み聞かせを継続 して、デザインやアートをテーマや活動の中心に したESD活動に取り組んでいきたい。

スタートアップ賞

宫城県仙台市立郡山中学校 校長 髙橋 教義

安全・安心な地域づくりに資する中学生が主導する防災教育と地域防災訓練

1 はじめに

(1) 防災教育のねらい

本校は仙台の副都心再開発により、大規模商業施 設が開店し、高層マンションが建設され、地域の生 活環境が激変しつつある。東日本大震災の教訓から、 地域の人々の命を守るために、自助と共助が、いか に大切かを、全ての住民が痛感している。

しかし、大規模都市開発や地域の核家族化・高齢 化、そして新たな住民との関わりなど、地域課題が 表出している。このため、支え合い、助け合い、共 に地域で生活する人々が共助で示された絆の大切さ を持ち続けることが、昨今、なおさら懸念される危 機的状況に向かいつつある。そこで学校とその中学 生が地域住民を巻き込む防災教育学習を創意・工夫 して行うことで、地域の関わりとつながりを継続・ 拡充する教育の実践展開を図ることにした。

中学生が主導する住民参加型・防災教育のねらい

副都心再開発と核家族化が進み、中学生と住民の絆が 懸念される地域において、地域防災力を高める。 ○災害時の自助・共助の方法を学ぶ

○防災意識と災害対策・対応力を高める ○防災・減災行動と防災対応能力を身に付ける

中学生が核となる防災教育活動に取り組み 地域住民を巻き込む活動に発展させ 小・中学校と住民の協働体制に進化を図る

「地域の人々との「関わり」・「つながり」を継続・拡充し、 防災・減災に強い、安全・安心で、持続可能な 強靭な地域社会づくりと、その担い手の育成を推進

さらには、安全安心な地域づくりと地域防災力の 向上は、学校と地域の共通する目標であることから、 その目標の達成度を高めることからも、学校と地域 が協働する防災教育に取り組むことが必要かつ重要 と考える。このような実践展開からは、中学生が防 災・減災の知識・スキル、行動を習得し、毎年卒業 して地域を支えることになり、地域防災を担う人材 道・東北ブロックにてブロック賞を受賞し、表彰式

が毎年確実に増員され、安全・安心で持続可能な地 域社会づくりに資する教育実践が可能になると考え ている。

(2) 平成28年度の教育計画

今年度の防災教育の計画概要は、①震災と教訓を 学ぶ、②復興を知る、支援することを実践のねらい として、9月上旬に1年生が仙台市沿岸部に、2年 生が県南部の沿岸部の津波被災地を視察し、復興支 援や交流を行い、その報告を11月の防災教育シンポ ジウムに生徒や保護者、地域住民に行っている。ま た、8月下旬には本校学区において、地域住民と小 中学生が地域清掃活動を共にすることを通じて、大 震災の時の共助を忘れず、地域の復興・復旧状況を 確認している。③防災・減災の知識、スキル、行動 を習得するため、学区内の小学校の防災訓練を中学 生が支援すると共に、本校生徒が主導して住民参加 型の地域防災訓練を行っている。④学習成果の発信 については、ユネスコスクール東北大会で生徒会が 成果発表をしたり、防災教育チャレンジプランにて 本校の防災教育を実践発表したり、各種の発表会に て学習成果を発信している。

防災教育の計画概要(平成28年度)

実践のねらい	教 育 実 践	時 期
①震災と教訓を学ぶ	・生徒が被災地視察、復興支援と	
②復興を知る、支援する	交流、視察・支援等の報告	9月
	・被災した農家や中学校と交流	
③防災・滅災の知識、	・生徒が学区内の小学校と市民	10月
スキル、行動を習得する	センターが行う防災訓練を支援	
メインプラン	・生徒が主導する地域防災訓練	11月
	・防災教育シンポジウムを開催	
④学習成果を発信する	ユネスコ・スクール東北大会等で発表	11月
	各種大会にて実践発表、資料公表	12月
⑤学習実践を評価する	・PDCAによる自己・外部評価	1月
自己・外部評価、	・防災教育チャレンジプラン等で	2月
第三者評価	報告と講評	
•		

今年度には、ボランティアスピリット賞にて北海

において生徒会が成果発表している。⑤学習内容と 方法そして成果や課題などについて、自己評価、外 部評価を生徒と教員が協働して実施し、防災教育 チャレンジプランにて第三者評価を専門家・研究者 からいただいている。

2 津波被災地への支援活動

(1) 平成28年度「津波被災農家に弟子入り体験」

1年生・約200人が、仙台市沿岸部の津波被災地 で農業を営む方々を支援するため、9月13日に被災 地を視察し、その後に綿花畑の除草作業を行ってい る。当日は小雨が降る天候にも関わらず、生徒たち は懸命に除草作業に取り組んでいた。震災前は広大 な水田地帯であったが、塩害により綿花を栽培して いる。





慰霊塔前で農家から講話

(2) 平成28年度・津波被災地の視察と中学生との交流

2年生・約200人が、県南部の沿岸部で津波によ り被災した地域と中学校を9月13日に訪問してい る。生徒は、語り部さんの案内で説明を聞きながら 被災地を視察し、津波被災で高床式の新校舎で学ん でいる中学生と交流活動を行っている。交流では、 互いの学校の紹介や防災学習の成果発表を行い、両 校生徒が人文字「ガンバロウ」を制作している。





ガンバロウの人文字

3 地域への奉什活動

本校生徒は、町内会や市民センターが開催する行 事を積極的に協力支援したり、部活動単位で様々な 開放講座を開催したりするなど、地域への奉仕活動 を行っている。



【町内会の地域一斉清掃】

【地域防災訓練の支援】





【祭で吹奏楽部が演奏、吹奏楽部が住民向け演奏会開催】





【科学部が小学生向け実験講座開催】【家庭部が幼児向け遊び講座】

4 地域や行政、小学校との協働と連携

(1) 地域や行政等との防災会議

本校学区域の防災・減災を推進するため、町内会 と本校が主体となり、地域防災に係る関係機関が参 加して防災会議を開催している。参加者・機関は、 町内会長や中学校長、区役所、消防団、体育振興会、 日赤奉仕団、婦人防火クラブ、老人会などであり、 地域の多様な組織が参加して地域防災の取組を推進 している。今年度も、本校の中学生が主導する地域 防災訓練を中心に、連携いただく本会議の参加組織 の方々と協議し、中学生等への連携・支援の在り方 等について検討している。

(2) 小・中連携推進のための合同研修会

本校の中学校区内には3つの小学校があり、防災 教育や学力向上、生徒指導等について連携推進を図 るため、毎年の夏季休業中に4校の小・中学校の全 教員を対象にした合同研修会を開催している。はじ めに全体会を開き、校長や担当教員が小・中学校4 校のそれぞれの教育実践の取組概要や防災教育など の特色ある教育活動、各校の現況等について研修と 情報交換を行っている。本年度も全体会に続いて、 現職研修、学力向上、生徒指導、特別活動・特別支 援教育の4分科会を開催し、各校の取組状況や課題

等の解決に向けた連携とその実践の在り方・推進方 法などについて研修と協議や検討を行った。

5 防災教育の成果を外部発信

(1) ユネスコスクール東北大会にて成果発信

ユネスコスクール東北大会は、ユネスコスクール に加盟又は加盟申請した小・中・高の学校と大学等 の関係機関が集い、FSDの教育成果の交流や情報共 有などのために、毎年、宮城教育大学にて開催され ている。本校では平成27年度にユネスコスクール加 盟の申請を行い、本大会にて平成27年から2年生一 クラスによる合唱披露と、生徒会による防災学習活 動の実践発表を行っている。

そして、平成28年度にはその成果が評価され、ユ ネスコスクール実践大賞を受賞している。





(2) 大阪の中学校が来校してユネスコスクール間交流

ユネスコスクールに加盟している大阪市立鶴見橋 中学校の代表生徒2人と教員2名が、平成28年8月 に来校し、本校生徒会2名と互いの学校紹介やESD の学習成果等について発表し合い、質疑を行った。 本校の生徒からは東日本大震災の状況とその後の復 興・復旧を含め、防災教育活動を中心に発表し、鶴 見橋中学校からは学区内や被災地でのボランティア 活動と学校間の交流活動の成果などについて発表が 行われた。その後、互いの学習活動において困難な ことや課題について質疑を行い、それぞれの解決策 等についての提案等が行われた。

6 中学生が主導する地域防災訓練と防災教育

(1) 地域防災訓練の概要

本実践は平成27年度から郡山中学校区の小学校と町 内会、消防団・消防署、PTA等が協働して地域合同 防災訓練を行っている。中学生は以下の図の各班活動 を主導して訓練を行い、町内会や消防団等の地域組織 の援助を受け、地域を巻き込む取組展開を図っている。

中学生が主導する地域防災訓練



○実施日時 平成27年から11月の第三週の土曜日 8:15~16:30

○実施形態 授業日として全校生徒が参加

本訓練では、3年生全員と2年生の一部生徒が上 図に示している6班を分担して実施する。各班には、 コンソーシアム「あすと郡山」の地域組織が援助し ており、このことにより地域を巻き込む形で中学生 が主導する地域防災訓練を展開している。また、訓 練の避難者役は、1年生全員と2年生の一部生徒そ して地域住民、保護者である。

○実施概要 以下の表に示す実施概要は、平成28年 度に行った内容である。各小中学校・公園の避難所 には各地区所属の小中学生や住民、保護者も避難者 として参加した。

H28・中学生が主導する地域防災訓練の概要

時刻	実施概要	生徒の活動	住民の動向
8:15	地震発生	一時避難所へ	○集団避難訓練
8:30	一時避難•誘導	集団避難訓練	·地区毎に集合
9:00	避難所開設・運 営	(郡小・東長小・公園)	・生徒が誘導して 避難所へ移動
10:00		<班毎に活動>	○避難所·体験
30	コース別・学習 A 消防署 B 国交省	- 遊難所の運営 - 炊き出し調理 - 救急救護	〇コース別学習 に参加・視聴
11:40	C 備蓄展示 炊き出し試食		内会長と生徒会は、 策本部【体育館ステージ】
13:30	防災教育 シンポジウム	①講演「大震災から何を 講師 東北大学地震・戦火	
16:00	生徒会が 運営・実施	②生徒による班活動・報 ③総括講評:(仙台市教)	D C 10011- 11 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17

(2) 生徒が主導する訓練概要【各班活動の様子】

平成27・28年度に、生徒が主導して取り組んだ 地域防災訓練において、各班の活動の様子を以下 に示す。



①避難所の開設と運営



②集団避難誘導



③炊き出し調理と配給



4教急救護



⑤取材報道活動



⑥災害対策本部の活動

(3) 郡山小学校区の小・中学生と住民や行政、 小学校教員が中学校へ集団避難

要援護者宅の確認後に、各地区一時避難場所に集 合し、集団避難訓練を中学校の校庭まで実施。

避難者は幼児、小・中学生、高齢者を含む住民、 小学校の教員や行政、交通指導隊・消防団など。





(4) その他、協力支援・準備訓練などの様子

①公益財団法人JKA「新世紀未来創造プロジェクト」 採択により炊き出し用の調理器材を整備





また、プロパンガスの燃料は地元燃料店と連携 ②みやぎ生協が食材物資を搬入

【災害時における"みやぎ生協"と"学校"の連携訓練】





③本校の保護者が炊き出し(豚汁)調理を支援





以上のように、中学生が主導する地域防災訓練では、 地域の人的・物的教育資源の支援のもと、年々、教 育実践を拡充・充実を図っている。中学生が主役で 訓練を主導し、中学生が地域貢献活動に尽力してい る。この取組では中学生が地域住民との関わりと繋 がりが醸成されるとともに、中学生は"支えられる 人"から"支える人、支え合う人"へと心と姿勢を変容 させている。

(5) 生徒会が司会・運営する防災教育シンポジウム を開催

生徒と住民が共に学ぶ防災教育を生徒会が開催し た。東北大学・海野教授が「大震災から何を学ぶの か?~災害から命を守るために~」と題し講演を行 い、生徒たちは熱心に視聴し、教授との質疑を行っ ている。





7、おわりに

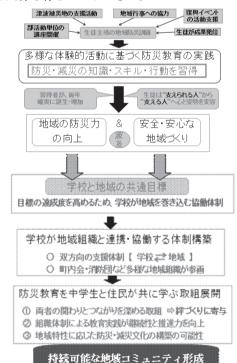
東北地方にはこれまでM7クラスの宮城県沖地震 が平均で約37年周期に発生していたものの、2011年 3月11日の東日本大震災はM9の誰もが経験したこ とがない、想定外の未曾有の大惨事を発生させた。 何度も宮城県沖地震を経験している仙台市立の学校 では、全ての校舎の耐震化工事が完了し、避難訓練 等の安全教育が続けられていた。しかし大震災後、 全ての生徒が自らの命を自ら守り、生き抜く力の糧

を学ぶためには、これまで行ってきた教育では限界 を感じざるを得ず、大震災で得た教訓を生かした新 たな防災教育の創出を図り、その実践に挑み、試み 続けることが必要かつ重要であると考えている。そ こで本教育実践に取り組み、右図に示す成果や効果 が得られている。

①生徒が多様な体験的活動を通じて、防災・減災の 知識とスキル、そして行動と防災対応能力を習得す る。⇒ そこでさらに、習得する生徒が年々増加さ れることにより、地域の防災意識と防災力を確実に 向上させ、安全・安心で強靭な地域づくりを担う人 材育成に資することができる。

②生徒は自主的で主体的に取り組む防災教育を実践 することにより"支えられる人"から"支える人、支え 合う人"へ、心と姿勢の変容が図られる。⇒ 生徒自 らが実行役として防災・減災に取り組み、他を支え、 他と支え合う共助や、他と関わり合う豊かな心と人 おいて、防災教育の実践として評価できるものと考 間性を培うことができる。

③生徒は津波被災地の支援活動を通じて、大震災 がもたらした現実とその復興を知り、被災者から 教訓を学ぶ。⇒ 生徒が主体的に復興支援に取り組 み、震災の教訓を継承し、持続可能な社会づくりを 担う人材を育むことができる。



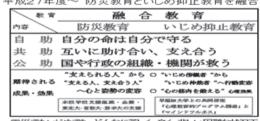
39

以上、本校の防災教育では保護者や地域を組織的 に巻き込む仕組みを構築しつつ、学校・地域支援組 織の設立を進めている。上記の図に示したように、 中学生が主導する地域防災訓練をメインプランに、 多様な体験的活動に基づく防災教育の実践を創出し ている。これらの実践により、生徒は防災や減災の 知識・スキル・行動と防災対応能力を習得する。毎 年、習得者が地域に増員され、確実に住民の防災意 識と地域防災力は高まる。また、実践を通じて生徒 は"支えられる人"から"支える人、支え合う人"へ心 と姿勢を変容し、豊かな人間性を育むことができる。 そして、実践が継続することで、地域の様々な年代 の人々と関わり、繋がり、延いては絆づくりに寄与 し、心が通い合う安全・安心な地域づくりに波及し、 持続可能な地域コミュニティの形成が期待できる。

本校の実践は汎用性、継続性、有効性、発展性に える。しかし、今後、実践を継続しながら、さらに 分析と検証を重ねて改善と改良を行っていく。そし て、現在から未来に向け、本実践による防災教育を 継続することは、地域防災力が偉大なる力(共助と いう、地域の人と人が結びつく強靭な絆を司るパ ワー) に進化するものと確信している。

さらに、防災教育といじめ抑止教育との融合教育 を早稲田大学と共同研究している。共助といじめ仲 裁者、自助とマインドフルネス(心の筋肉を鍛える) との間における相乗効果を実践研究している。

平成27年度~ 防災教育といじめ抑止教育を融合



震災でもいじめでも、どんなに苦しく、辛く、想し、困難な状況?でも、 自他の命と心を共に支え、 支え合う人と集団を育み、 培う

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

東京都目黒区立田道小学校 校長 丸山 智子

健康教育からアプローチするESD

1 はじめに

【本校のプロフィール】

目黒区は東京23区の南西部に位置し、人口は約 27万人、落語「目黒のさんま」の舞台となった地 でもある。サンマを目の前で焼き、無料で振る舞 うまつりは、テレビ放送のニュースや新聞等によ り紹介されている。

本校は、児童数326名12学級の中規模校である。 昭和7年に開校し、平成29年度には開校85周年を 迎えた。地域にも卒業生が多く在住し、地域のコ ミュニティーで活躍している。本校とのつながり も深く、かつて学校・家庭・地域の協議会で策定 した「田道共育目標」を掲げ、連携して児童の成 長を育んでいる。

本校の周囲は住宅街であるが、近くには都内有 数の桜の名所である目黒川があり、地域の歴史や 環境問題を考える題材にもなっている。

学区域内には複数の大使館、隣接地域には、防 衛省の留学生会館があり、そこから通う外国籍児 童の転出入も多い。出身国も多国にわたる。外国 からの友達と日常的に交流のある環境である。校 内には日本語教室があり、個別もしくはグループ で日本語の学習が進められている。

このような環境を生かし、環境教育と国際理解 教育に継続的に取り組み、本校の特色ある教育活 動としている。平成27年度からは、目黒区教育委 員会教育開発指定校として外国語活動の研究を行 い、目黒区立小学校の外国語教育のパイロット校 としての役割も担っている。

【本校の健康教育のねらい】

本校の教育では、児童一人一人「いのちある自分」 が持続可能な社会の担い手になると捉えている。 いのちある自分を支え、基盤となるのは、生命を 維持し、持続させる「食・栄養・健康」である。 と心が元気であるからこそ、未来の地球にとって

自己を心身ともに最良の状態を持続できる力が あってこそ、他者と共に生き、自分が生きる未来 に向けて、考え、行動する実践力を発揮できるも のと考える。

本校では「食・栄養・健康」を核にした健康教 育に全校を挙げて計画的、継続的に取り組み、自 ら健康づくりに励む子どもの育成を目指している。

本校の健康教育の目標は、次のとおりである。

- 自ら健康づくりに励む子ども-

- ○自分の体や健康に関心をもち、すすんで健康づく りをする子
- ○自分の体力を知り、すすんで体力づくりに取り組 む子
- ○まわりの人の体や心を大切にする子
- ○安全な行動を理解し、落ち着いた生活を送ろうと する子

【健康教育からアプローチするESD】

これまで、特色ある教育活動としてきた環境教 育と国際理解教育は、それぞれ独立した教育活動 であったが、ESDの考え方を取り入れて、健康教 育を核とした構造に編み直しを行うこととした。 それが、次の構想図である。



<健康教育からアプローチするESD構想図>

構想図に表すことにより、これまで行ってきた 教育実践が、ESDの考えの基に関連させたり、新 たな価値付けたりすることができた。その上で、「体 ていけるであろう。」という仮説をもって校内で共 通理解をし、学年の発達段階に応じた学習や活動 を展開していくこととなった。児童にとっては「元 気があれば何でもできる。」という未来に向かって いく原動力となる気持ちをもてるようにすること も目標の一つである。

体と心の健康の充実を図ることは、「いのちある 自分 | を大切にするだけでなく、環境にかかわる 活動や国際理解にかかわる活動をとおして、他者 とのつながり、ひいては地球とのかかわりについ て考え、行動できる児童の育成につながっていく と考えている。自分のことだけでなく、共に生き ていく周りの人たちのこと、生きる営みの舞台と なる地球の環境のことを考え、行動できる未来の 社会に担い手を育てていくことが、学校教育の役 割の一つであると捉え、「健康教育からアプローチ するESD に全校で取り組むこととなった。

2 実践内容

(1) 健康教育計画に位置付けた教材の活用

ネスレ ヘルシーキッズ プログラム教材(以下教 材)を活用した学習を学校全体の健康教育全体計 画に位置付けた。養護教諭と学級担任が中心とな り、学級活動や給食指導の時間等に実施している。

【教材を活用した保健指導・食育】

未来の担い手を育成するという方針の基で重視 しているのは、いのちある自分を大切にするとと もに、人とのつながりを大事にするということあ る。自分の健康づくりはもちろんのこと、まわり の人の体や心を気遣い、共に健康であろうとする 児童の育成を図っている。

教材は、低学年から用意されており、継続して 活用することにより、児童は自分の体がどのよう につくられているのか、どうすれば元気を保つこ とができるのかを考え、健康な体は自分でつくる ことの意味を理解することができた。

また、学級集団の中で、友達とのかかわりをと おして学ぶことにより、元気な体は、一人一人違 うことにも気付くことができ、友達との違いを尊 重し、思いやりの心をもつことにもつながってき

よいことを、力を合わせてみんなで考え、行動した。友達の体を傷つけてはいけない。ということ を児童が意識するようになり、学校全体が落ち着 いた生活を送ることができている。



く教材を活用した養護教諭による保健指導>



<教材と教科等の学習との関連>

【教材を活用した健康教育と環境教育】

2年生では、教材「からだのもと」を使って、 からだのもとをつくっているのは食べものである ことを理解した上で、生活科において「野菜の栽培」 や「グリーンピースの皮むき」に取り組んだ。教 材には、給食の献立も食べもののはたらきから3 色に分ける学習があり、自分たちが皮むきをした グリーンピースご飯が給食で出てくると、食べも ののはたらきを考え、3色に分けようとする姿が 見られた。グリーンピースが嫌いな児童も、自分 のからだにとって大切な栄養をとろうと少しでも 口にする姿が見られ、児童の行動にも変容が見ら れるようになった。



く2年生 グリーンピースのさやむき>

本校には、調理の際に出る野菜くずなどを、コ ンポストにより土壌改良材へとリサイクルしてい る。毎年9月には土壌改良材を全校児童が袋詰め し、3年生以上の有志が教員とともに区民まつり の会場で無料配布したり、近隣の保育園へ届けた りして喜ばれている。



く児童有志による土壌改良材の無料配布>

コンポストでリサイクルできるのは、児童の目 にふれることのない食材の不可食分などで、残菜 はリサイクルしていない。児童は、自分たちの食 べ残しは、ゴミにしかならないことを知っている。

食べものを残さずにいただくことは、自分のか らだにとっても、地球にとってもよいことである ことを、児童の学年、発達段階に応じて、教材に よる知識の理解と、活動の2つの側面から、全校 共通して指導にあたっている。

これは余談であるが、2年前、本校に着任して 驚いたのは、デザートより野菜主体の副菜の方が 残菜は残らないのである。ちなみに残菜量ゼロだっ た野菜の副菜は「もやしのサラダ」と「一塩きゅ うり」と意外にもシンプルである。野菜そのもの の素材の味を味わえる副菜であり、児童の味覚が 豊かになりつつあることを感じている。

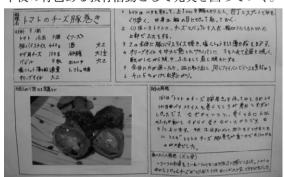
【5、6年生「家族のための私の料理」】

教材を計画的に継続して利用することにより、 低学年より系統だった保健指導や食育が全校を挙 げて実施できること、他の教科や領域等とも関連 させた指導を展開でき、学んだ知識等を児童自身 が活用する場面を作ることができた。

教材で学んだ内容は、知識として終わるのでは なく、児童の生活の中で生きて働く力となってい く。高学年では、家庭科の授業において、学んだ 知識を活用し、各家庭で保護者を巻き込み、献立 作成と調理の実践的な学習を展開している。

5、6年生は、教材における食の学習のまとめ と家庭科の「家族のための私の料理」の学習と関 連させた。児童が、栄養バランスを考え、自分も 家族も元気にする献立を立てた。夏休みには各家 庭で、児童が保護者とともに調理し、家族と一緒 に食事をとるという実践を行った。机上の学びで 終わるのではなく、献立作成、調理、食事という 過程をとおして、自分で考えたことを実現し、低 学年から継続的に学んできた食に関する知識を保 護者に伝えることができた。保護者も児童と共に、 食と健康との関わりを考え、児童が実生活に活用 する力を付けていくことにつながった。

今後は、健康と環境との関わりにも着眼し、本校 の環境教育をESDの考え方に基づいて改善を図り、 本校の特色ある教育活動として充実を図っていく。



<「家族のための私の料理」レシピと感想>

(2) 運動による健康づくり

継続的に取り組んできた持久力を高めるペース ランニングやなわとびなどの運動に加え、昨年度 から、体幹を鍛える運動に学校全体で取り組んで いる。その核が「田道小体幹体操」である。

【田道小体幹体操】

作成された体幹体操は、ディズニーシーの「レジェ ンド・オブ・ミシカ | の曲に合わせた3分間程度 の内容で、1年生から6年生まで全員で一斉に取 り組める分かりやすい動きになっている。体育の 授業開始時の他に、運動会や自然宿泊体験教室、 親子レクリエーション活動で活用されている。



<運動会にて全校で田道小体幹体操>



<家庭教育学級にて親子で田道小体幹体操>

PTA主催の家庭教育学級では、児童が大人に体 幹体操の動きを見せたり、伝えたりする姿が見ら れた。今後は、学校行事等で児童と保護者が集う 機会に「親子DE体幹体操」を企画し、児童が保護 者を健康な体づくりに巻き込む活動を展開してい くことが考えられる。

【食と運動を関連させた健康卓球】

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムの一つに健 康卓球がある。本校で取り上げたきっかけは「へ ルシーキッズ健康卓球 | の特別授業であった。競 技の卓球のようなラリーを求めるのではなく、6 人で卓球台を囲み、球を転がしてラリーを続ける 「コロコロ3色ラリー」は卓球初心者でも十分に楽 しめる内容である。

また、「まとあてピンポン」では、卓球台の上に 本校の児童の実態に応じて専門家の助言を得て 並べられている食品のイラストが描かれた的に球 を当てると点数になるため、教材で学んだ栄養の 知識を生かそうする姿が見られた。運動量は決し て多くはないが、運動に苦手意識をもつ児童にも 抵抗なく楽しめ、運動に親しむきっかけにもなる と考えている。

> 年齢を問わず楽しめる健康卓球は、異学年児童 同士や地域の方との交流に発展させられる可能性 をもっている。今後は、栄養の知識にも触れながら、 コミュニケーションと健康づくりにつなげる取組 へと生かしていく。



<6人で卓球台を囲む「コロコロ3色ラリー」>

(3) 夢や希望に向かって

本校では未来の担い手の育成のために、「体と心 の元気があるからこそ、未来の地球にとってよい ことを力を合わせてみんなで考え、行動していけ るであろう。」という仮説を立てて、健康教育から アプローチするESDに取り組んでいる。体の健康、 体力向上だけでなく、児童が日々過ごすことに前 向きな気持ちやくじけない気持ちをもてるように、 心健やかに過ごせるようにすることにも力を入れ ている。その一環として行っているのが、パラリ ンピアンとの出会いと交流である。

児童が体験的・直接的に学ぶ機会として、本校 では「現場・現物・現実」の3現を重視している。 パラリンピアンとの出会いは、健康づくりが夢や 希望を実現する基盤であり、原動力であることを 児童が感じ、考える貴重な機会となっている。

【パラリンピアンとの出会い】

ネスレヘルシーキッズ健康卓球の特別授業にお なった。 いて、パラリンピック卓球日本代表選手が来校し 卓球の実技披露を依頼した。快くお引き受けいた ンピック東京大会に絶対に出場するという強い決 考えている。 意を児童に伝えてくださった。心と体の健康づく りが夢に向かって准んでいける力となることを、 児童は感じ取ることができた。

児童は、講演会後に行った4年生の「健康卓球 特別授業 | や6年生の「給食交流会」において、 遠い存在だったパラリンピアンとの距離が縮まり、 夢を実現する可能性は誰にでもあるということに 気付くことができた。

今後は「田道小学校選手応援プロジェクト」を 企画し、学校を挙げてパラリンピアンの2020東京 大会の出場を応援し、選手との交流活動を続けて いくことを考えている。このような交流をとおし て、健康であることは、夢や希望に近づくことで あることを体験的に学習し、健康づくりの行動に つなげられるようにしていく。

3 成果と課題

これまで、本校の健康教育、環境教育、国際理 解教育はそれぞれ独立した教育活動であった。い ずれの教育も長く実践が継続されてきた。しかし、 教員も入れ替わり、いつしかルーチンワークのよ うな位置付けとなってしまっていることが課題で あった。

独立した3つの教育活動を、健康教育を基盤と して、ESDの視点で見直し、価値付けをすること により、構想図化し、これからの児童に必要な資 質・能力を育成するための教育活動へとリニュー アルすることができたのである。

ESDが教員、保護者に浸透しているかといえば、 本校の場合、途上にあると言える。しかし、本校 は何か特別なことに取り組んでいるのではない。 日常の教育活動を見直し、ESDという新たな価値 付けを行い、再生しているのである。今回の受賞は、 学校全体が自信をもってESDを推進する後押しと

健康は、学校の校門を出て家庭や地域でも、年 た。このまたとない機会に、児童向けの講演会と 代を問わず一緒に考えていけるテーマである。今 後は、校内だけでなく、家庭や地域にも、本校の だき開催された講演会では、ハンディを抱えなが 取組を知ってもらい、児童とも交流のある活動に らも夢に向かって努力してきたことや2020パラリ 参加していただくような実践を進めていきたいと

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

大阪府泉南郡岬町立深日小学校 岡田 良平 河村 愛美 西泰 亨 長根 わかば

子どもの体力づくりと食育・健康教育を中心にした学校づくり

1 はじめに

規模校である。全学年が単学級で、平成22年度は 児童数が231名であったが、わずか8年間で約60% も児童数が減少している。こうした急激な児童数 の減少によって、従来までの学校づくりに支障が 出てきている現状にある。児童数の減少に伴い、 子どもの遊び方も大きく変化し、全国で実施され る新体力測定における結果も芳しくない状況が続 いていた。そうしたなかで、大阪府の「子ども体 却することで、自分たちの課題や成果を感じやす 力づくりサポート事業 | を诵して、和歌山大学教 育学部を介在として、子どもの体力向上と食育を 中心とした生活習慣の改善に向けた取組とプログ ラムを学校全体で進めている。

2 新体力測定の結果を活かした体力向上にむけた実践 なったと考える。

図1・2は、新体力測定における3年間の5年 生男女別の総合評価の変化を示している。5年男 子の場合、平成27年度では、A·B評価とも0%であっ たが、平成29年度にはA・B評価あわせて45%を 超え、A・B・C評価合わせると80%以上の数値を 示している。5年女子は平成27年、28年ともA評 価の女子はおらず、B評価が大きく上昇する結果 であったが、29年度では、実に90%以上の女子児 童がA・B評価を獲得したことになる。また、男女 ともA・B評価の児童が増加しているだけでなく、 D·E評価の児童が減少傾向にあることにも注目し たい。これだけの劇的な変化は、新体力測定の正 しい計測方法が教職員に再確認されただけでなく、 教職員や児童がスポーツテストへ取り組む意欲の 変化が大きかったのではないかと指摘できる。

これまでの深日小学校は新体力測定の該当学年 である5年生だけが行ってきたが、全校児童が参 加するようになってから、体育の授業時間を合わ

せて高学年と低学年で教えあいが行われるように 本校は大阪府の南端に位置する児童数96人の小 なっていった。また、練習の際にも教職員が低学 年の児童でもわかりやすいかけ声を見つけるなど、 創意工夫と活気が生まれるようになった。また、 和歌山大学の学生ボランティアが、 毎週1回定期 的にサポートに来てくれることで、シャトルラン など児童が苦手とする種目にも積極的に参加する ようになっていった。

> 各自の測定結果をチャート図にし、全児童に返 くできるように工夫している。さらに、参観日に 保護者にも子どもたちと一緒に体験してもらうな ど、教職員、児童、地域も含めた意識変化を促し ていった。こうした2年間の取組が、大阪府のみ ならず、全国平均の結果をも大きく上回る結果と

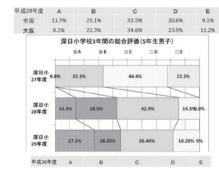


図1. 新体力測定の3年間の推移(5年男子)

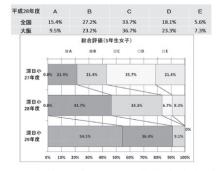


図2. 新体力測定の3年間の推移(5年女子)

3 大学を介在にした小規模校ならではの運動会 毎時間の導入として行えるものを考案した。また、 づくりに向けた取組

いとして位置づけるのではなく、保健・体育学専 攻の学生として体育の素晴らしさを児童や地域の 住民に伝えること、また、過疎化による児童数の 減少が競技数や時間にも影響し、年々寂しくなっ ていく運動会をどのように盛り上げていくのかを テーマとした取組を行った。

大学側は運動会運営の担当者を2名付け、学校 側の体育主任と連携して協議し、新種目や大学の デモンストレーションを企画した。新種目となっ た「借り人競争」では学生が児童や地域の人とと もに参加し、世代間を越えた交流の種目を目指し た。また、学生は2チームに分かれ、それぞれのチー ムの応援合戦や綱引きに率先して加わった。また、 **昼食の休憩時間には、学生が主体となってデモン** ストレーションを進行し、児童や地元の中学生、 保護者などと一緒に50メートル走を競争する企画 を行った。特にこの企画は、陸上部などの運動部 に所属する学生と真剣勝負するということもあり、 学生の身体能力の高さを児童や地域の人たちが知 る機会となった。(写真1)



写真 1 学生と地域の交流種目(借り人競争)

11月から12月半ばにかけて、体づくりに関する 授業づくりを保健・体育学教室が中心となって実 施した。単元をマット運動として、そのためにバ ランス感覚、体幹、筋力を鍛えるメニューを取り 入れたサーキットトレーニングを担任、体育主任、 町教委、大学とで協議し、小学校の教員が継続して、

大学側からバランスボールを貸与され、児童は道 10月に実施された運動会では、和歌山大学教育 具を使って、楽しみながら体幹トレーニングを行 学部保健・体育学教室の学生が多数参加した。こ い、ペア活動を通して相手の体の動きを知るとい の際、学生が単なるボランティアや運動会の手伝 うこともできた。こうした活動は体育を専門とし てこなかった教員にとって、知見を広げるだけで なく、児童も主体的に協働しながら活動する体育 を経験する場となった。(写真2)



写真2 バランスボールによる授業づくり

授業づくりの支援で学生が学校に滞在する時間 が増えたため、学校側も児童の体力向上に向けて 児童会を中心に20分休憩を使い、全校児童と学生 とで「バナナおに」を行った。また、それに呼応 する形で学生側が企画して、同じ時間帯に全校児 童と「手つなぎおに」を実施した。こうした相互 交流の機会が、徐々に広がり、昼休みにドッヂボー ルをしたりする風景が次第に醸成されていった。

4. 小大連携を生かした取組の発展

このように新体力測定での連携を機に、小学校 と大学の協力関係が深まっていった。そこで、小 学校側からの提案で、キャリア教育の一貫として、 教育委員会と和歌山大学の協力を得て、5年生(20 人)が12月に大学見学を実施した。当日は、実際 に授業をしている教育学部の数学や国語、美術の 講義やゼミを見学し、保健・体育学教室の心肺機 能測定の実験現場、学部長室や体育館、図書館の 見学、昼食は500円のお小遣いで学食を自由に選ん で食べる経験をした。また、構内の広場で群読を 暗唱で披露し、日頃の学習の成果を学生や大学関 係者に聞いてもらい、非常に温かい声援を頂いた ことで自信につながった。

この経験は児童らにとって非常に貴重な経験と

なり、保護者をも巻き込んだ学習意欲の向上とい う思わぬ形となって現れた。例えば、毎年12月に 深日小で実施される地域と学校がつながる重要な 行事である深日小まつりの中で、「子どもの主張」 と題し、町長や多くの来賓、保護者がつめかけた 体育館の壇上に上がり自分の夢などを発表する場 がある。そこで、「和歌山大学に行きたい」と題し て発表する児童や「和歌山大学に准学してアナウ ンサーになる夢をかなえたいしという児童もいた。 また、懇談では、食卓で大学准学の話題で盛り上 がり、実際に貯金を始める家庭もあった。児童ら も自主学習や町が実施する実力テストに向けて准 んで学習する児童が増えた。特に印象的だったの は、生活習慣が乱れがちだった児童が大学見学を 機に、自分の夢を叶えるために明確に進学や進路 を考えて、自ら率先して生活習慣を正し、学習に 取り組む姿勢や意欲までも変えたことである。

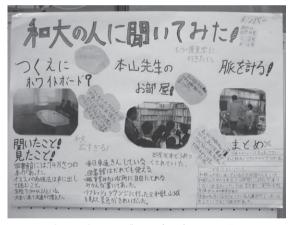


写真3 計6つのグループがポスターを作り、 校内と役場のロビーに掲示した

5 本校で実施する食育

本校では、健康教育の一つとして発達段階に応 じて全学年で食育を実施している。(表1)

表1. 深日小食育実施計画		
1年生	はじめての給食	
	おはし名人になろう	
2年生	朝食づくり	
3年生	むしばきんをやっつけよう	
4年生	すききらいをなくそう	
	望ましいおやつの食べ方	
5年生	田植え・稲刈り体験	
6年生	栄養バランスを考えた	
	お弁当作り	

岬町は多奈川地区に給食センターがあり、そこ で町内全小学校の給食を作っている。また町内に 栄養教諭が一人配置されている。食育の導入とし て毎年1年生の給食が開始する前に栄養教諭が給 食指導を行い、給食時のマナーを学ぶ。給食セン ターの調理員が給食を作っている様子を映像で見 ることで毎日大人数の給食を作ることの大変さを イメージしやすい。そのため感謝の気持ちを持っ て残さず給食を食べることの大切さを学ぶことが できる。(写真4)



写真4 1年生 はじめての給食

また、2年生では自分でできる簡単な朝食とし てピザトースト作りを行い、赤・黄・緑の3色の 栄養素について学習する。(写真5) それぞれの栄 養素の働きについて知ることで、自分の食生活を 振り返るきかっけとなっている。また毎日の給食 も栄養教諭がおいしく、栄養たっぷりのメニュー を考えていることを知ることができる。



写真5 2年牛 朝食づくり

②養護教諭が実施する食育

給食時のマナーの一つとして正しくおはしを使 うことがある。しかし正しくおはしを使えず、食 べ物をこぼしたり、食べるのに時間がかかってし

①栄養教諭が実施する食育

まう児童がいた。そのため、低学年で正しいはし の持ち方についての学習を行うこととした。「おは し名人になろう! | と題し給食センターからはし を借りて、正しい持ち方を学んだり、豆つかみ競 争を行ったりした。また豆腐やしょうゆ、きな粉 など、様々な食材が大豆でできていることを知り、 すりこぎ、すり鉢を使ってきな粉づくり体験を行っ た。授業の後、学年だより等で授業の様子を家庭 に知らせることで、家庭でも正しいはしの持ち方 を意識してもらうきっかけとなった。(写真6)



写真6 おはし名人になろう

歯磨きの仕方を学ぶとともに、糖分を多く含むお いる人に感謝の気持ちを持ち、給食を残さず食べ やつを食べすぎないようにすること、食べたらす ぐ歯磨きをすることを知る。4年生では「すきき らいをなくそう!」と題し、野菜の役割を学んだり、 行った。そのあと正しい歯磨きの仕方を歯の模型 5年生から始まる家庭科に向けて3色の栄養素に を使って分かりやすく説明した。(写真8) ついて理解を深める。また、高学年では望ましい おやつの食べ方について学習する。実際に炭酸飲 料に含まれるものと同じ量の砂糖水を試飲したり、 1日に必要な塩・砂糖・油の量について知る。ま た塩・砂糖・油は体にとって必要な栄養素ではあ るが、摂りすぎると将来様々な病気にかかってし まう危険性があることを学び、高脂血症になった 血液の実験を行った。授業後の児童の感想では、「炭 酸飲料に含まれている砂糖の量が想像より多くて とてもびっくりした | 「これからはおやつを食べす ぎないようにしたいしなどがあり、自分の食生活 を振りかえるきっかけとなっている。(写真7)



写真7 望ましいおやつの食べ方

上記のほかにも、5年生の社会科の授業の一環 として地域の方の協力を得て、異学年交流として 2年生とともに田植え・稲刈り体験をしている。 また6年生の家庭科の授業で、栄養のバランスを 考慮したメニューを自分たちで考えた弁当作りを 行っている。

③保健給食委員会

委員会では、常時活動として給食栄養黒板に3 色の栄養素を示している。また年に1、2回給食 の残量チェックや身だしなみチェックを行い、そ 3年生では毎年歯の染め出し検査を行っている。 の結果を児童集会で報告している。作ってくれて ることの大切さを再確認する。また、6月のむし 歯予防週間にあわせて児童集会でむし歯予防劇を



写真8 歯の模型を使った歯みがき指導

今後食育担当である養護教諭を中心に、学校、 地域、家庭が連携し、児童の健康課題に応じた学 びを発展していく必要がある。

6 成果と課題

体力向上の根幹に食育を位置づけ、栄養教諭や 養護教諭と連携しながら、食育と健康教育の充実 を目指してきた。小大連携によって、児童の体力 向上や食や保健衛生への関心も高まった。また、 得られた成果を本校の教員が大学や他の自治体へ 赴き、講演するようになった。「小さな町だから、 小さな学校だからできない」と下を向くのではな く、「小規模校だからこそできること」を教員が大 学生や子どもたちとともに探しあい、大人も子供 も夢や希望を持って学校や地域を形作っていくこ とができつつある。

今後は異学年交流を軸にして様々な行事や取組 を進め、地域や大学生の人材を活用しながら健康 を見つめ、つくり、活かし、広げることを楽しみ ながら学校づくりをより発展させていきたい。

ネスレ日本株式会社



自分のからだは自分でつくる 「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム

1. 取組の背景

めたアンリ・ネスレが、150年前にスイスで安全で 栄養価の高い乳幼児用乳製品を開発し、これを販 売するための会社を設立しました。それ以来、社 会のために価値を創造し、それによって企業にとっ ての価値も創造する、「共通価値の創造」の考え方 が、ネスレの基本的な経営方針になっています。

ネスレのPurpose (存在意義) は、生活の質を高 め、さらに健康な未来づくりに貢献することです。 2. 日本でのネスレ ヘルシーキッズ プログラム その実現のために次の3つの柱を掲げています。

ネスレのPurpose (存在意義)

- ○個人と家族のため さらに健康で幸福な生活を実現します
- ○コミュニティのため 困難に負けない、活力あるコミュニティを 育成します
- ○地球のため 未来の世代のために資源を守ります

ネスレは、Purposeを実現するために「栄養・健 康・ウェルネス | 「農村開発 | 「人材、人権とコン プライアンス | 「水 | 「環境サステナビリティ | の 5分野に注力し、さまざまな取組を行っています。

「栄養・健康・ウェルネス」の主要な取組の一つ に「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム | がありま す。2009年に開催されたCSV (共通価値の創造) フォーラムにおいて、ネスレスイス本社のポール・ ブルケCEO(現会長)が、ネスレが事業を展開す るすべての国で、世界の最も複雑な課題である子ど 導の時間にご活用いただけます。 もの健康問題に取り組むことを考え、このプログラ ムを実施することを発表しました。ネスレ ヘルシー 年度からは、テキスト中心の授業とともに、スラ キッズ プログラムは政府やNGO、NPOなどの公的

機関と協働して、その国や地域の子どもたちが抱え 栄養不足による乳幼児の死亡率の高さに心を痛 る課題を解決するようにオリジナルのプログラムと して開発され、子どもたちの栄養に対する理解を促 進し、正しい食生活を促す食育と、十分にからだを 動かすことの大切さを学ぶ運動をセットにした取組 になっています。2016年までに84カ国で311の団体 と協力して展開され、830万人の子どもたちに対し て教育プログラムを支援しています。

日本では、一般社団法人ニュートリション運動 推准会議 子どもの健康づくり委員会をパートナー に活動しています。

2011年から2017年末までに、のべ8.500の小学校 で160万人超の児童が、本プログラムで人間の生き る根幹である「食べる|「動く|「休む| ことの大 切さを学んでいます。





3. プログラムの特徴

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムは、栄養と 運動の組み合わせによって、子どもたちの健康づ くりをサポートしています。

●食育・栄養プログラム

教材中心の学習で確かな知識と実践力を習得し ます。学習指導要領に対応し、食育、学級活動や 総合的な学習、保健体育、身体測定などの保健指

児童配布用テキストは無料提供しています。2018 イド教材やデジタル教材を充実させる予定です。

持続可能な社会を担う子どもたちの健康づくり ~夢や希望を持ち、他老と共有できる力を育む~ 身体的健康 ・成長や健康のための 知識、行動力

① スライド教材 3種

『栄養、からだ、元気』『栄養、骨、元気(2018 年度提供予定) 『朝ごはん5つのパワー(同)』

② 児童配布用テキスト 5種

『げんきのもと』『からだのもと』『自分のからだ は自分でつくる』『水とからだの大事な話』『野菜 をとろう

●運動プログラム

運動プログラムは、運動技能の習得だけでなく、 そのプロセスから自分と向き合い、他者とかかわ る貴重な経験を提供します。子どもたちの精神的、 社会的な健康づくりには、運動プログラムの継続 的な取組が重要です。

①「ヘルシーキッズBRTプログラム」

児童期におけるからだの動かし方の基礎である 「バランス」「リズム」「タイミング」を習得するた めのプログラムです。



Bバランス : スピニング (回転運動) Rリズム :ホッピング(連続跳躍運動) Tタイミング:ジャンケン (瞬発運動)

個人と集団でのトレーニングにより動作・技能 の習得、運動能力の相乗的な効果が期待できます。 継続的に動作練習を実施することで、自らのレベ ルアップから、目標達成感、運動有能感を実感し、 子どもたちの自信につながります。

②「ヘルシーキッズ鬼ごっこ」

鬼ごっこには、まわりとのコミュニケーション、 思いやりやチームワークなどが必要です。遊びの 中で栄養に興味をもち、遊びながら健康知識を得 ることができます。



③ ヘルシーキッズ健康卓球

子どもの健康づくりには、学校・地域・家庭の 連携が必要であるとの考えから、地域コミュニティ での異世代交流プログラムとして開発されました。 健康卓球は、年齢、体力、卓球経験の有無などに かかわらず誰もが楽しめます。栄養の知識を取り 入れた卓球ゲームは、運動だけでなく大人の食育 として、健康づくりに寄与できます。



「ヘルシーキッズ健康卓球」は、子ども、保護者、 地域のシニアなどの共通プログラムとして注目さ れ、まちの健康拠点づくりや地方自治体と連携し た取組が始まっています。

4. プログラムのビジョン

子どもたちが「食べること」や「からだを動か すこと | の大切さを知り、積極的に実践することは、 前向きに物事に取り組む姿勢や自らと向き合い、 考える力を育みます。また、社会とのかかわりの 中で他者を尊重し、自分を見つめることで、子ど もたちの夢や希望の実現につながります。

プログラムが目指すのは、身体的な健康にとどま 成です。このような健康は、持続可能な社会づくり 寄与している事例に感銘を受け、表彰しました。 を担う子どもたちに、夢や希望をもって、他者と共 有できる力をもたらしてくれると考えています。

ネスレ日本は、子どもが成長する過程において よって、心身豊かに成長することを願うとともに、し、ウェブサイトでメッセージを発信しています。 「ネスレヘルシーキッズ憲章」を定めています。

ネスレ ヘルシーキッズ憲章

- 1.「自分のからだは自分でつくる」という、 からだづくりに対して前向きな子どもを 育てます。
 - ●「巧みに運動する身体能力」
 - ●「健康・安全に生きるための身体能力」
 - ●「社会生活において必要な身体能力」
- 2. <<運動>>と<<栄養>>を組み合わせた 「からだづくり」に取り組みます。
- 3.「社会性」や「対人関係能力」、「他者への 思いやり」を育てます。

5. ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

持続可能な社会の担い手となる子どもたちの健や かな成長への共感から、ESD大賞の枠組みの一つと して、ネスレ日本ヘルシーキッズ賞を設けています。 2014年から表彰が始まり、4年目となる本年度から "食育や栄養教育と運動の実践を通じて持続可能な 社会を担う子どもたちの健康を育てる実践研究事例 に対して、優れた事例を表彰しています。

本當の審査基準

- 1. 食育と運動を実践し、自分の成長や健康 を考え、行動する。
- 2. 自らよく考え、思考し、判断する。
- 3. 他者を尊重し、自分の役割を理解する。
- 4. 未来像を予想・予測・期待し、それに近づ くために行動する。

2017年度は、食と運動の取組を中心とした健康 らず、精神的にも社会的にも健康な子どもたちの育 教育を通して、子どもたちの輝ける未来づくりに

6. 「夢をかなえる自分づくり」

本プログラムでは、さらに子どもたちが夢や目標 「からだづくり」に自ら関心を持ち、さらに、仲間 に近づくための取組の一つとして、元サッカー日本代 とともにその喜びや楽しさを分かち合うことに 表の宮本恒靖さんがヘルシーキッズサポーターに就任

> 2014年には、宮本恒靖さんは福島県や東京都の 小学生に向けて、一つひとつの目標をクリアする ことが夢に近づくこと、そのためにも正しい食生 活が必要であることを講演しました。

> 昨年は、リオデジャネイロパラリンピック卓球 に出場した岩渕幸洋選手が児童と健康卓球の特別 授業を実施しました。岩渕選手が自分の障害を受 け入れた気持ちや目標であるパラリンピック出場 の話に、子どもたちは熱心に耳を傾けていました。



2017年度は、熊本県出身の元オリンピック陸上 選手の川上優子さんが、地元小学校でネスレ ヘル シーキッズ プログラムの栄養と運動の授業を定期 的に行い、児童の健康づくりに取り組んでいます。

夢をかなえるために必要なからだづくり、あき らめない気持ち、それらを支える栄養と運動の重 要さを今後も伝えていきます。

<問い合わせ先>

一般社団法人ニュートリション運動推准会議 子どもの健康づくり委員会

TEL: 03-3541-6362

(土日祝日を除く10:00~17:00) $E \times - \mathcal{V}$: info@ugoku-taberu.com

URL: http://www.ugoku-taberu.com

第8回ESD大賞 受賞校実践集

発行日: 平成30年3月13日

発 行: NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

http://www.ip-esd.org

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel: 03-3295-7051 Fax: 03-3295-7054

E-mail: info@jp-esd.org